

額安寺第5・7次

(範囲確認調査)

郡山城第43次

(柳澤神社社務所建替えに伴う調査)

2007年

大和郡山市教育委員会

額安寺第5・7次
(範囲確認調査)

郡山城第43次
(柳澤神社社務所建替えに伴う調査)

例言

1. 本書は平成6年度、平成8年度に実施した文化庁主管の国庫補助事業・市内遺跡発掘調査等事業の報告書であり、下記の調査を収める。

年 度	平成6年度	平成8年度	
調 査 名	額安寺第5次	額安寺第7次	郡山城第43次
調 査 地	額田部北町1305他	額田部北町1298他	城内町字天守郭255, 255-1
調査期間	平成7年1月23日～2月28日	平成9年3月17日～3月31日	平成8年6月27日～7月13日
調査面積	300㎡	30㎡	77㎡
調査原因	範囲確認調査	範囲確認調査	柳澤神社社務所建て替え
調査担当	技術吏員 濱口芳郎	技術吏員 濱口芳郎	技術吏員 濱口芳郎
調査体制	教育長 岩田吉郎, 社会教育課長 半田義次, 課長補佐 吉村典悦		

2. 報文の編集は、調査担当者である大和郡山市教育委員会技術吏員濱口芳郎（当時）が作成した終了報告、概報原稿等を基に現文化財係長服部伊久男が行った。
3. 図版の作成、写真撮影、報文の執筆には下記の補助員が参加した。
長谷川義明（奈良大学大学院・現橿原考古学研究所）

本文目次

I 額安寺第5・7次

1. 調査の契機と経過（服部）	1
2. 額安寺第5次発掘調査（濱口）	4
3. 額安寺第7次発掘調査（濱口）	8
4. 出土遺物（長谷川）	9
5. まとめ（服部）	12

II 郡山城第43次

1. 調査の契機と経過（服部）	25
2. 郡山城第43次発掘調査（濱口）	28
3. 出土遺物（長谷川）	30
4. まとめ（服部）	32

図目次

額安寺第5・7次

- 図1 調査地位置図 (S=1:25,000)
- 図2 調査地位置図 (S=1:2,500)
- 図3 第2・5・6・7次調査地位置図
- 図4 第1・2・3トレンチ平面図
- 図5 トレンチ断面図
- 図6 主要遺構図
- 図7 トレンチ平面図
- 図8 北壁土層柱状断面図
- 図9 SX02出土遺物実測図 (S=1/3)

- 図10 SX03出土遺物実測図 (S=1/3)
- 図11 第2トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)
- 図12 SD01出土遺物実測図 (S=1/3)
- 図13 第3トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

郡山城第43次

- 図14 調査地位置図 (S=1:25,000)
- 図15 調査地位置図 (S=1:2,500)
- 図16 トレンチ平面図
- 図17 SX01・02断面図
- 図18 出土遺物実測図 (S=1/3)

写真目次

額安寺第5・7次

- 写真1 調査前全景 (南から)
- 写真2 第1トレンチ (東から)
- 写真3 第1トレンチ (西から)
- 写真4 SX02 (東南から)
- 写真5 SX03 (西から)
- 写真6 SX03 (北西から)
- 写真7 第2トレンチ全景 (東から)
- 写真8 第2トレンチ全景 (西から)
- 写真9 第2トレンチ SE01 (北西から)
- 写真10 第2トレンチ SE02・03 (西から)
- 写真11 第2トレンチ SD02・SK01 (北から)
- 写真12 第2トレンチ SE02 (北から)
- 写真13 第2トレンチ SE03 (西から)
- 写真14 第3トレンチ (東から)
- 写真15 第3トレンチ (西から)
- 写真16 第3トレンチ SD01 (北から)
- 写真17 第3トレンチ SE04・SK02 (北から)

- 写真18 第3トレンチ SK04 (北東から)
- 写真19 第7次調査調査前全景 (南東から)
- 写真20 トレンチ全景 (南東から)
- 写真21 トレンチ全景 (北東から)
- 写真22 出土遺物 (1)
- 写真23 出土遺物 (2)
- 写真24 出土遺物 (3)
- 写真25 出土遺物 (4)
- 写真26 出土遺物 (5)

郡山城第43次

- 写真27 調査前全景 (西から)
- 写真28 調査風景 (西から)
- 写真29 調査区全景 (北東から)
- 写真30 池 (西から)
- 写真31 SX01 (南から)
- 写真32 SX02 (北東から)
- 写真33 出土遺物 (1)
- 写真34 出土遺物 (2)

I 額安寺第5・7次

1. 調査の契機と経過

額安寺は古名を額田寺と称し、飛鳥時代に額田部氏の氏寺として創建されたといわれている。鎌倉時代に忍性の活動により再興し、戦国の惨禍で焼失したが近世初頭に所領の安堵を受けて再起し現在に至っている。

本寺の旧蔵にかかる額田寺伽藍並条里図は奈良時代の稀有の絵画資料であり、国宝に指定されている。本図には当時の伽藍や所領が明確に描かれており、寺院景観を知る上で重要な資料となっている。

当寺においてはこれまで下記のとおり13次にわたる調査が実施されている。現在の境内地においても5回の調査が行われているが、伽藍などの主要遺構はいまだに検出されていない。

額安寺の発掘調査一覧

次数	調査地	調査原因	調査機関	調査期間	調査面積	備考・文献
1	額田部寺町36	庫裏建設	橿原考古学研究所	1975 (昭50) 7.25～ 8. 9	140	①
2	額田部北町1305	グランド造成	橿原考古学研究所	1978 (昭53) 7.17～ 7.21	102	②
3	額田部寺町36	収蔵庫建設	橿原考古学研究所	1979 (昭54) 7.25～ 8.13	35	①
4	額田部寺町36	収蔵庫建設	橿原考古学研究所	1985 (昭60) 9.10～ 9.26	31	③
5	額田部北町1305他	範囲確認	大和郡山市教育委員会	1995 (平7) 1.23～ 2.28	300	本書
6	額田部北町1297-1他	駐車場造成	大和郡山市教育委員会	1996 (平8) 5.27～ 6. 6	104	④
7	額田部北町1298他	範囲確認	大和郡山市教育委員会	1997 (平9) 3.17～ 3.31	30	本書
8	額田部寺町36	墓地造成	大和郡山市教育委員会	2001 (平13) 2.13～ 3.31	200	⑤
9	額田部寺町47-4他	境内地拡幅	大和郡山市教育委員会	2002 (平14) 3.13～ 3.29	65	—
10	額田部寺町50-1他	畑造成	大和郡山市教育委員会	2003 (平15) 3. 4～ 3.31	12	—
11	額田部寺町53-2他	駐車場造成	大和郡山市教育委員会	2003 (平15) 2.12～ 2.20	84	—
12	額田部寺町6-1他	自治会館建設	大和郡山市教育委員会	2003 (平15) 12.17～12.22	68	—
13	額田部寺町36	庫裏建設	大和郡山市教育委員会	2004 (平16) 9.30～10. 8	20	—

①奈良県教育委員会1979「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1978年度』

②奈良県教育委員会1981「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1979年度』

③奈良県教育委員会1986「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1985年度 (第2分冊)』

④国立歴史民俗博物館2001「考古資料編」『国立歴史民俗博物館研究報告』第88集

⑤大和郡山市教育委員会2003「額安寺第8次発掘調査報告書」大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

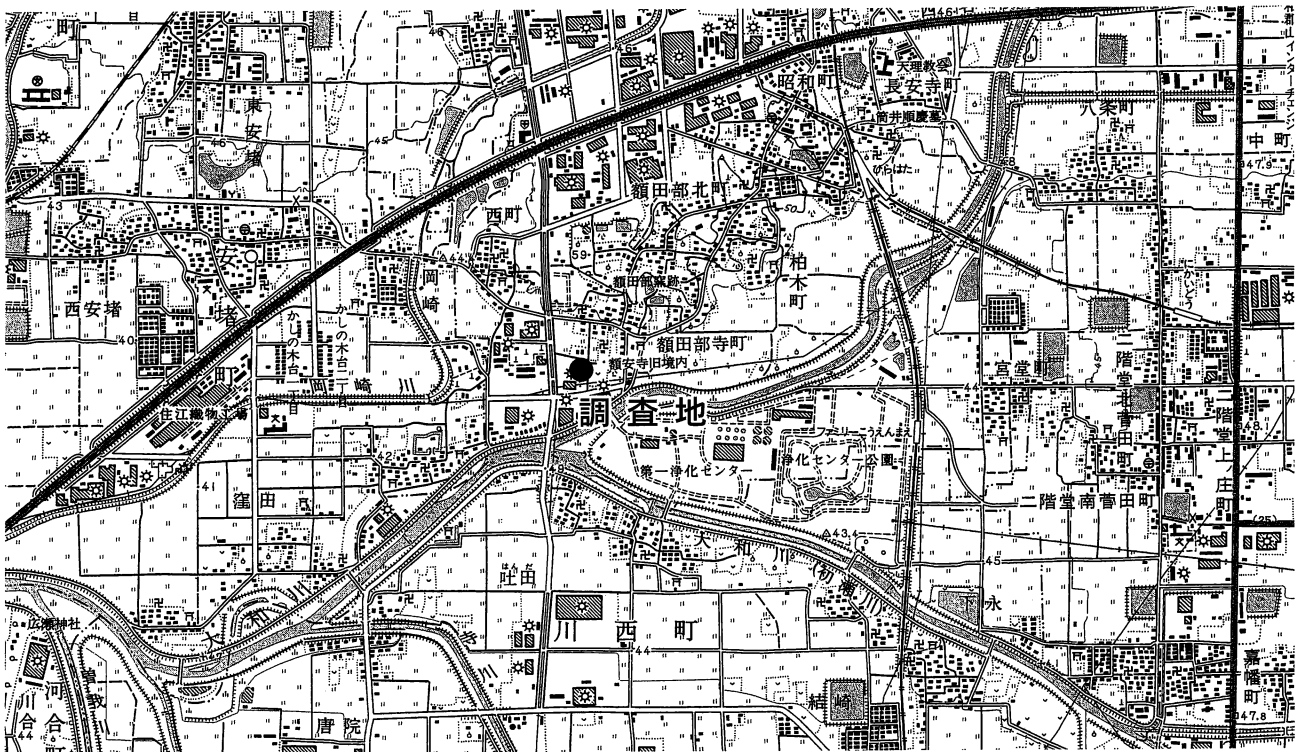


図1 調査地位置図 (S=1:25,000)

今回報告する第5次調査は当該地が奈良県流域下水道工事事務所の地元補償の一環として、地元の公民館の建設用地の候補地に上がってきたことから、遺構の有無や遺存状況を確認するための調査を実施する必要が生じ、文化庁、奈良県と協議のうえ調査を実施したものである。当該地にはすでに昭和50年代前半に約2mにおよぶ盛土がなされ、地元住民のゲートボール場として利用されていた。1978年（昭和53年）に橿原考古学研究所が第2次調査を行っている地点である。

第7次調査は、第5次調査と第6次調査（民間駐車場建設に伴う事前調査）の遺構面の標高差が1.5mほどあり、両調査区の間には大きな比高差があることが判明したが、この部分は東西に里道が通っている部分であり、もともと段丘崖に相当するのではないかという見解が提出されており、その点を確認するために実施したものである。（服部）

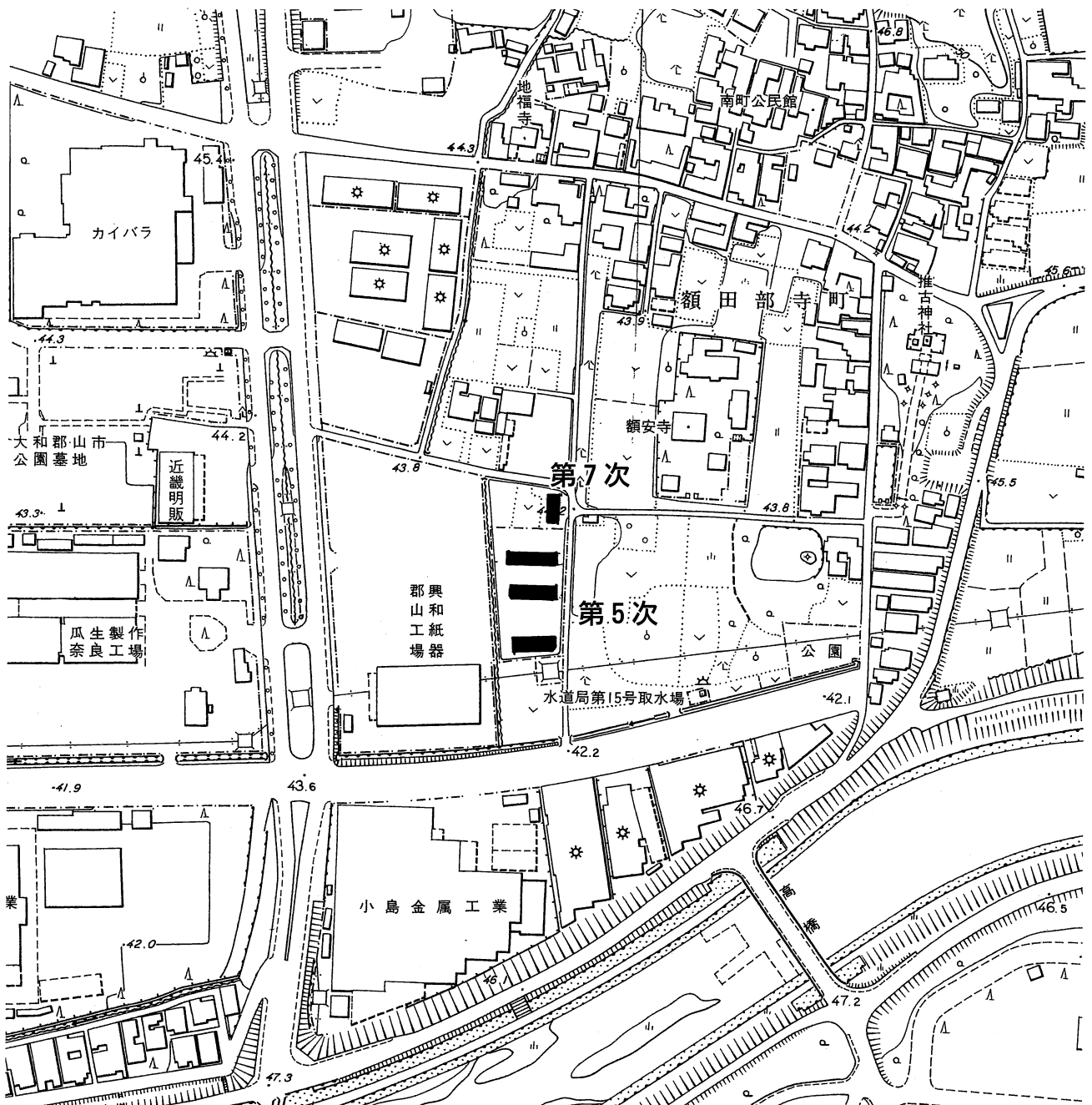


図2 調査地位置図 (S=1:2,500)

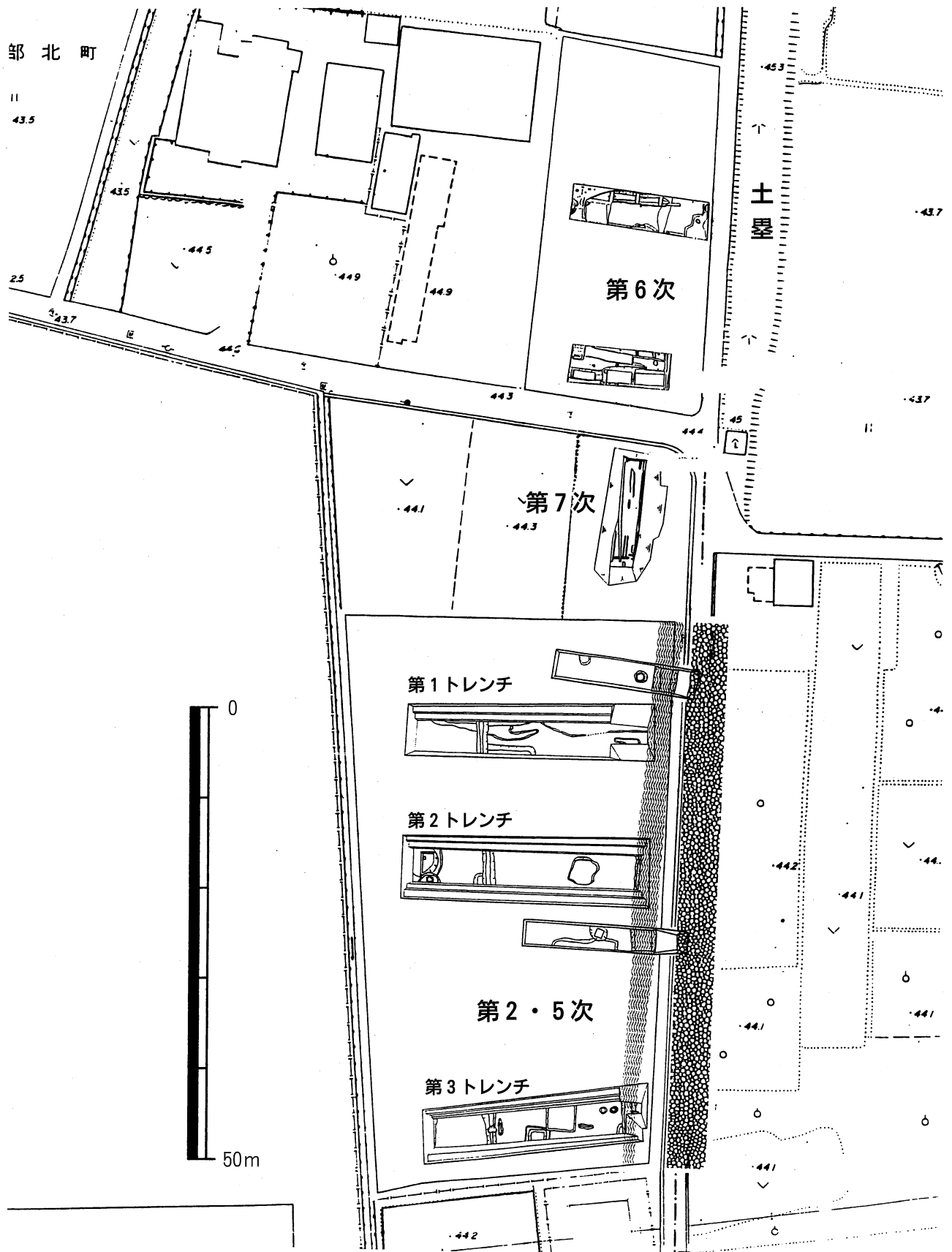


図3 第2・5・6・7次調査地位置図
 (第5次調査第1トレンチ北側, 第2トレンチ南側の)
 狭小なトレンチが第2次調査地点

2. 額安寺第5次発掘調査

a. 方法

本調査は、額安寺寺域範囲確認のための発掘調査であり、1978年に榎原考古学研究所が実施した第2次調査の対象地と同一の場所に当る。

調査地は、地域住民がゲートボール等に使用している市有地のグラウンドで面積約2,050㎡である。この地域内に東西方向に東西長約25m、幅約4mの3本のトレンチ（以下、北より第1、2、3トレンチと呼称する）を設定し、重機により遺構面まで掘削、以下精査ならびに遺構の掘削を人力で行った。

b. 層序

調査地は全域にわたって、昭和50年代前半に入れられた約2mの地上げの盛土があり、直下に旧耕土、近世包含層、遺構面となる。遺構面は水色砂層で湧水が激しく脆弱な土層である。

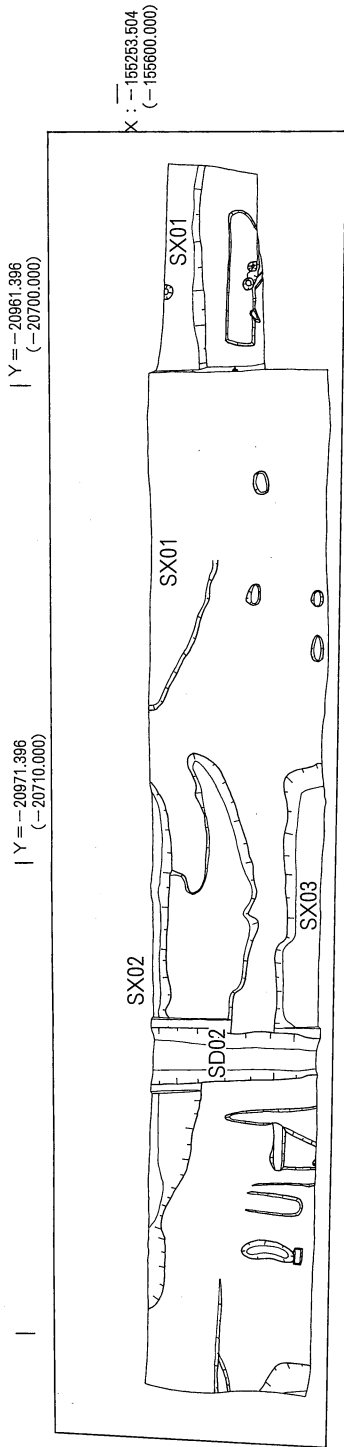
c. 遺構

遺構はそれぞれのトレンチでほぼ均等に検出されている。主なものは溝、井戸、遺物を多量に包含する落込である。以下、トレンチ毎に検出遺構の概要を説明する。

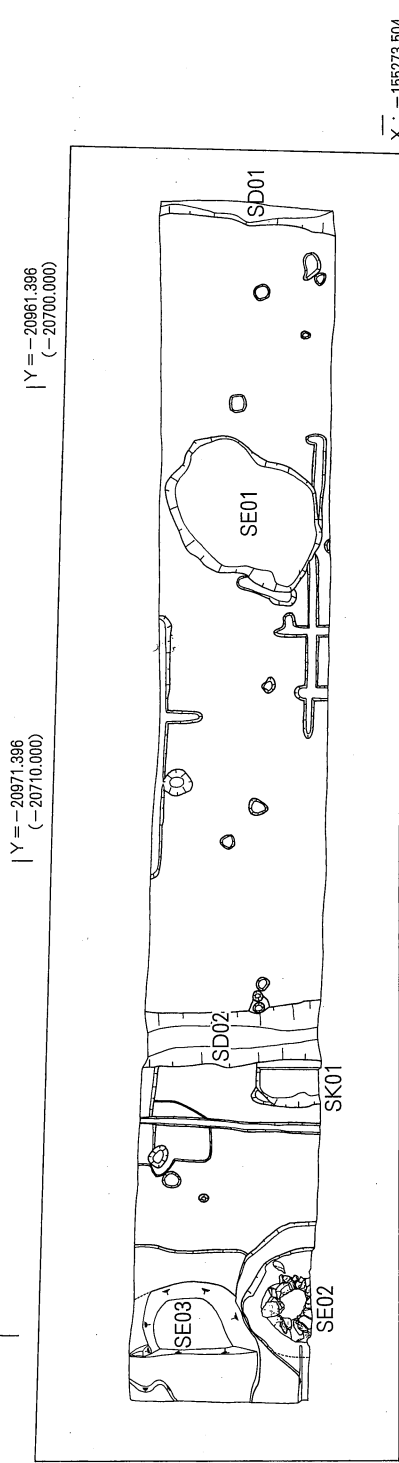
まず、第1トレンチであるが、遺物を多数包含する落込が3カ所で検出された。トレンチ東半の北壁にかかるもの（SX01）、西半北壁にかかるもの（SX02）、西半南壁にかかるもの（SX03）である。SX01は多角形を呈する、深さ10cmの浅い落込で、遺物の包含量は3つのうち最も少ない。SX03は方形を呈すると思われる落込で、コンテナ5箱分の遺物が出土している。SX02は検出時では不定形をなし、深さも10cmとSX01に似るが、北壁際でさらに落ち込み、約2.5mの間隔を空けてSX03と対置する形をとり、規模、埋土の状況も酷似することから対となる同一の遺構と推察される。

第2トレンチでは、井戸、現在も部分的に残存している土塁にともなう側溝（SD01）の西岸、方形を呈する土壌等が検出された。井戸はトレンチ東よりのもの（SE01）、西端の南壁にかかるもの（SE02）、北壁と東壁にかかるもの（SE03）の3基がある。SE01は井戸枠が抜き取られており、検出面では長径約3mの不定形を呈していた。約1m掘り下げた段階で激しい湧水のため掘削を断念した。そのため井戸枠の存在を確認することができなかった。SE02は石組の枠をもつ井戸である。石組は最大70cmのものから人頭大のものを積み上げ、こぶし大の石や平瓦を隙間に充填している。井戸枠内は楕円形を呈し、長辺約60cmである。SE03もSE01同様に井戸枠が抜き取られていたが、検出面より約1.8m掘り下げたところで井戸枠の最下端と思われる曲げ物の枠を検出した。この枠は厚さ5mm、幅20cmの板を3重に巻いており、直径は78cmであった。

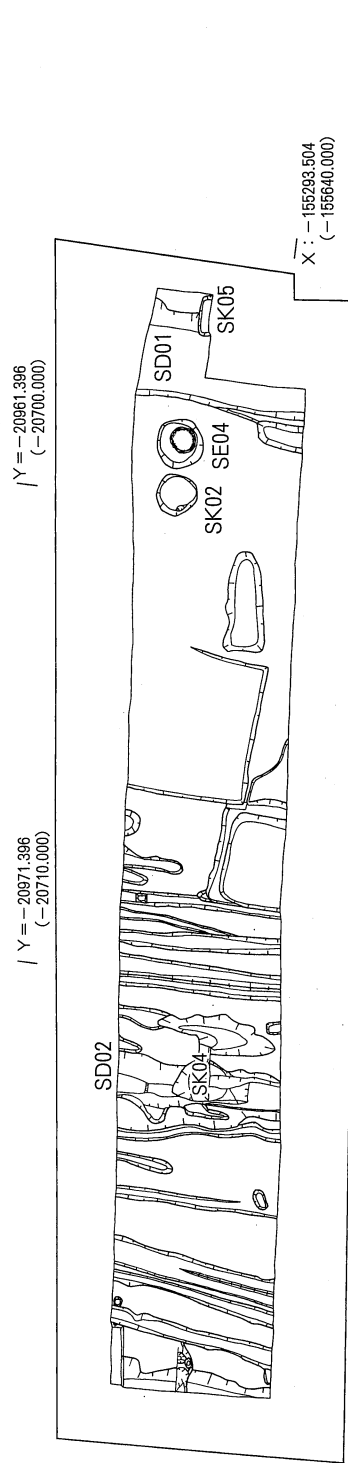
第3トレンチでは、第2トレンチで検出したSD01、井戸（SE04）、土壌（SK02・04）を検出した。SD01は、このトレンチでは東岸も検出でき、幅1.8m、深さ約30cmと判明した。SE04は幅10～20cm、長さ90cmの板を桶状に巻き付けた井戸枠をもち、井戸枠検出面での直径は約60cmであった。検出面より1.7mまで掘り下げた結果、上段の枠の内側にさらに下段の井戸枠を確認した。枠は上段のそれと同じ板材を使用しており、直径は50cmであった。土壌は4基検出されたが、その中で近世以降、耕作用水路として掘削された溝（SD02）下で検出されたSK04が特異な形態をもつ。すなわち断面形態が袋状をなしており、最下層に植物遺体を多数包含していたのである。袋状を呈することから祭祀関係の遺構とも考えられるが、地山が脆弱な砂層で湧水が激しいため崩落した結果、袋状となったものと思われる。また、SD01に切られる形で、東端部にSK05がある。（濱口）



第1トレンチ



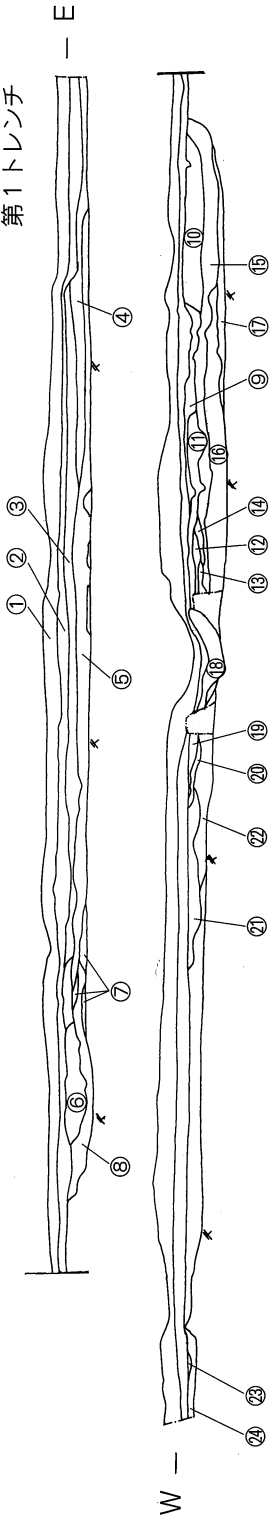
第2トレンチ



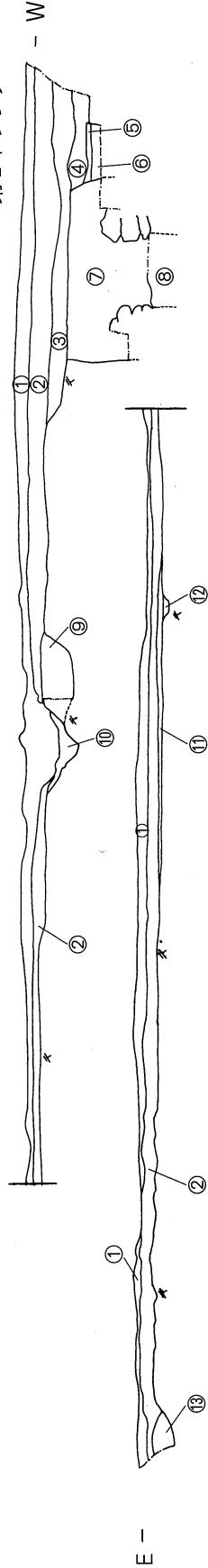
第3トレンチ

図4 第1・2・3トレンチ平面図
(括弧内の国土座標は旧座標値)

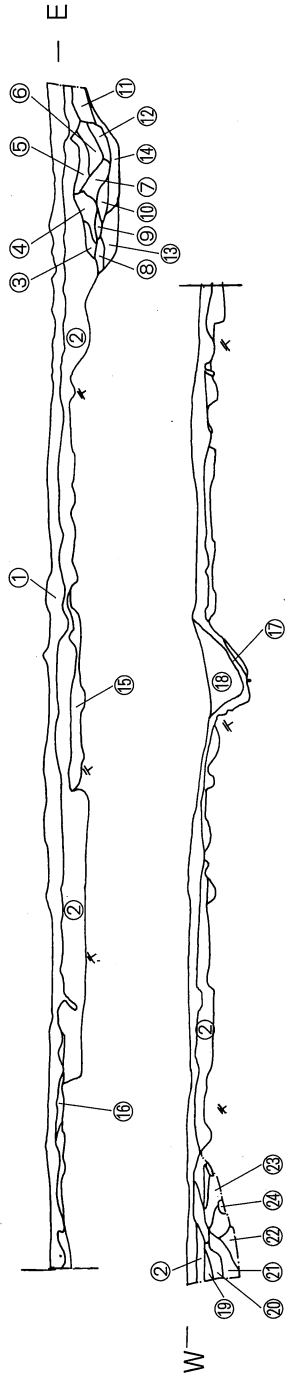
第1トレンチ



第2トレンチ

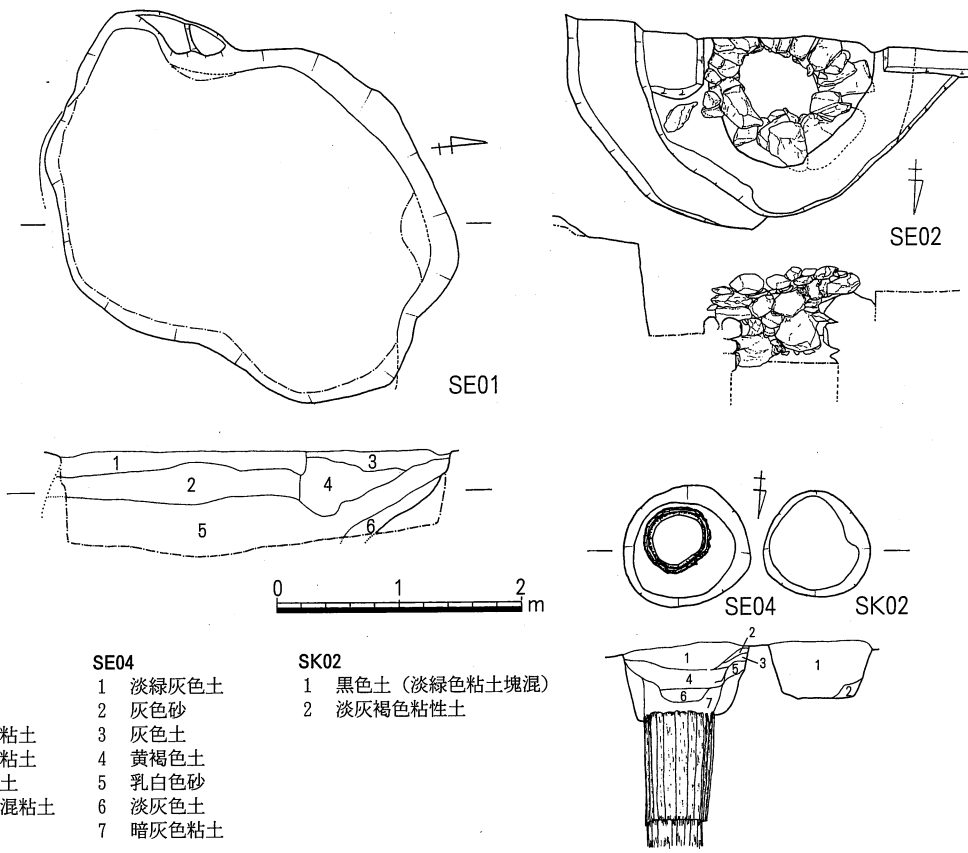


第3トレンチ



- | | | | |
|-----------|--------------|-------------|-----------------|
| 第1トレンチ | 第2トレンチ | 第3トレンチ | 第3トレンチ |
| ① 耕土 | ① 耕土 | ① 耕土 | ① 耕土 |
| ② 灰褐色土 | ② 灰褐色土 | ② 灰褐色土 | ② 灰褐色土 |
| ③ 褐灰色粘土 | ③ 灰黄褐色粘質土 | ③ 灰褐色土 | ③ 赤褐色土 |
| ④ 灰褐色砂混粘土 | ④ 淡褐色粘砂 | ④ 黄褐色土 | ④ 青灰色砂 |
| ⑤ 淡褐色粘土 | ⑤ 明黄褐色粘土 | ⑤ 砂質土 | ⑤ 赤褐色粘土 |
| ⑥ 灰青色粘土 | ⑥ 灰青色粘土 | ⑥ 紫褐色粘土 | ⑥ 灰青色粘土 |
| ⑦ 淡褐色砂 | ⑦ 黄色粘土混淡褐色粘土 | ⑦ 淡灰紫色砂 | ⑦ 紫白色粗砂 |
| ⑧ 青褐色土 | ⑧ 暗灰色粘土 | ⑧ 赤灰色土 | ⑧ 青白色粗砂 |
| ⑨ 暗灰褐色粘土 | ⑨ 淡灰色砂混粘土 | ⑨ 黄色粘土混褐色土 | ⑨ 青白色粘砂 |
| ⑩ 黄灰色土 | ⑩ 青灰色粘質土 | ⑩ 暗青・青白混砂質土 | ⑩ 赤褐色砂 |
| ⑪ 淡緑灰色粘質土 | ⑪ 灰褐色土 | ⑪ 青灰色・黄色混土 | ⑪ 淡黄色砂 |
| ⑫ 褐色砂 | ⑫ 淡褐色粘土 | ⑫ 青灰色粘質土 | ⑫ 灰青色粘土 |
| ⑬ 灰青色土 | ⑬ (不明) | ⑬ (不明) | ⑬ 砂質土 |
| ⑭ 青緑色土 | ⑭ 灰青色粘土 | ⑭ 紫褐色粘土 | ⑭ 紫白色粗砂 |
| ⑮ 灰青色土 | ⑮ 黄色粘土混淡褐色粘土 | ⑮ 淡灰紫色砂 | ⑮ 褐灰色・褐色粘土混 |
| ⑯ 黄色灰色混粘土 | ⑯ 暗灰色粘土 | ⑯ 赤褐色土 | ⑯ 灰褐色土 (暗茶褐色土混) |
| ⑰ 暗灰褐色粘土 | ⑰ 淡灰色砂混粘土 | ⑰ 黄色粘土混褐色土 | ⑰ 青灰色砂 |
| ⑱ 黄灰色土 | ⑱ 青灰色粘質土 | ⑱ 暗青・青白混砂質土 | ⑱ 赤褐色砂 |
| ⑲ 淡緑灰色粘質土 | ⑲ 灰褐色土 | ⑲ 青灰色・黄色混土 | ⑲ 灰青色粘土 |
| ⑳ 褐色砂 | ⑳ 淡褐色粘土 | ⑳ 青灰色粘質土 | ⑳ 灰青色粘土 |
| ㉑ (不明) | ㉑ (不明) | ㉑ (不明) | ㉑ 砂質土 |
| ㉒ 灰青色土 | ㉒ 灰青色粘土 | ㉒ 紫褐色粘土 | ㉒ 紫白色粗砂 |
| ㉓ 青緑色土 | ㉓ 黄色粘土混淡褐色粘土 | ㉓ 淡灰紫色砂 | ㉓ 褐灰色・褐色粘土混 |
| ㉔ 灰青色土 | ㉔ 暗灰色粘土 | ㉔ 赤褐色土 | ㉔ 灰褐色土 (暗茶褐色土混) |
| ㉕ 黄色灰色混粘土 | ㉕ 黄色粘土混褐色土 | ㉕ 黄色粘土混褐色土 | ㉕ 青灰色砂 |
| ㉖ 暗灰褐色粘土 | ㉖ 淡灰色砂混粘土 | ㉖ 暗青・青白混砂質土 | ㉖ 赤褐色砂 |
| ㉗ 黄灰色土 | ㉗ 青灰色粘質土 | ㉗ 青灰色・黄色混土 | ㉗ 灰青色粘土 |
| ㉘ 淡緑灰色粘質土 | ㉘ 灰褐色土 | ㉘ 青灰色粘質土 | ㉘ 灰青色粘土 |
| ㉙ 褐色砂 | ㉙ 淡褐色粘土 | ㉙ (不明) | ㉙ 砂質土 |
| ㉚ 灰青色土 | ㉚ (不明) | ㉚ 紫褐色粘土 | ㉚ 紫白色粗砂 |
| ㉛ 青緑色土 | ㉛ 灰青色粘土 | ㉛ 淡灰紫色砂 | ㉛ 褐灰色・褐色粘土混 |
| ㉜ 灰青色土 | ㉜ 黄色粘土混淡褐色粘土 | ㉜ 赤褐色土 | ㉜ 灰褐色土 (暗茶褐色土混) |
| ㉝ 黄色灰色混粘土 | ㉝ 暗灰色粘土 | ㉝ 黄色粘土混褐色土 | ㉝ 青灰色砂 |
| ㉞ 暗灰褐色粘土 | ㉞ 淡灰色砂混粘土 | ㉞ 暗青・青白混砂質土 | ㉞ 赤褐色砂 |
| ㉟ 黄灰色土 | ㉟ 青灰色粘質土 | ㉟ 青灰色・黄色混土 | ㉟ 灰青色粘土 |
| ㊱ 淡緑灰色粘質土 | ㊱ 灰褐色土 | ㊱ 青灰色粘質土 | ㊱ 灰青色粘土 |
| ㊲ 褐色砂 | ㊲ 淡褐色粘土 | ㊲ (不明) | ㊲ 砂質土 |
| ㊳ (不明) | ㊳ (不明) | ㊳ 紫褐色粘土 | ㊳ 紫白色粗砂 |
| ㊴ 灰青色土 | ㊴ 灰青色粘土 | ㊴ 淡灰紫色砂 | ㊴ 褐灰色・褐色粘土混 |
| ㊵ 青緑色土 | ㊵ 黄色粘土混淡褐色粘土 | ㊵ 赤褐色土 | ㊵ 灰褐色土 (暗茶褐色土混) |
| ㊶ 灰青色土 | ㊶ 暗灰色粘土 | ㊶ 黄色粘土混褐色土 | ㊶ 青灰色砂 |
| ㊷ 黄色灰色混粘土 | ㊷ 黄色粘土混褐色土 | ㊷ 暗青・青白混砂質土 | ㊷ 赤褐色砂 |

図5 トレンチ断面図



SE01

- 1 暗灰色土
- 2 赤褐色土
- 3 淡緑黄色粘土
- 4 黄色砂混粘土
- 5 暗灰色粘土
- 6 青灰色砂混粘土

SE04

- 1 淡緑灰色土
- 2 灰色砂
- 3 灰色土
- 4 黄褐色土
- 5 乳白色砂
- 6 淡灰色土
- 7 暗灰色粘土

SK02

- 1 黑色土 (淡緑色粘土塊混)
- 2 淡灰褐色粘性土

図6 主要遺構図

3. 額安寺第7次発掘調査

本調査は平成8年度国庫補助事業として実施したものである。第5次調査（平成6年度国庫補助事業）と第6次調査（平成8年6月実施）における遺構面の比高差が1.5m以上あることから、地形変化の状況を確認するため両調査区の間地点である当該地において発掘調査を実施した。

調査は重機により遺構面までを掘削、遺構を人力によって掘削した。重機掘削の結果、遺構面は現地表面下約2mにおいて確認され、当初の目的であった地形変化を確認することはできなかった。地山は青白色砂層が主体を占め、その上面にごく薄い粘土層が部分的に存在しており、第5次調査地と同様の状況であった。

遺構は農耕に関連すると見られる近世の素掘溝が数条と杭の痕跡とみられる小ピット、そしてトレンチ北端で確認された東西方向の中世の溝状遺構である。この遺構は北側の道路までのびており、南岸を確認したに過ぎないが、段差部縁辺に掘削されたもの、第5次調査で確認されたSD01と同一の遺構であるかもしれない。あるいは第6次調査地南トレンチで検出された方形の掘り込みSX01につながる可能性もある。

出土遺物は素掘溝から少量の陶磁器と土師器の小片が、溝状遺構からは土師器、瓦質土器、瓦があった。

以上のように、調査面積が狭く、遺構の遺存状況も希薄であったが、中世に遡る溝状遺構の存在により新たな推測が可能となった。先にも述べたが、この溝状遺構が5次調査のSD01につながるならば、SD01は現在の額安寺西方の中世土塁西側に沿っているのではなく、本調査地北側の道路下に存在するであろう河岸段丘の段差部に沿って西に折れることになる。また、もし第6次調査で検出されたSX01につながる다면、SX01北岸が河岸段丘の段差を形成することになるか、あるいは本調査地地山面が1.5m以上削平されていることになる。いずれにせよ、より明確な考察を行うためには今後の調査を待たねばならない。（濱口）

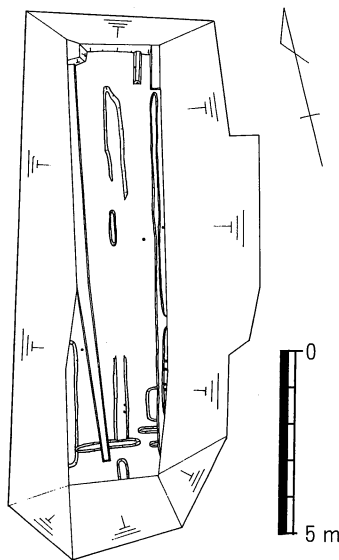


図7 トレンチ平面図

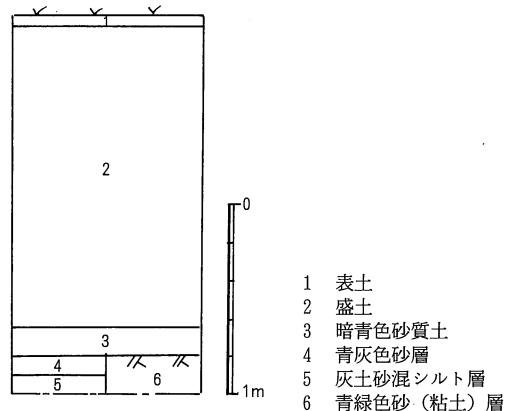


図8 北壁土層柱状断面図

4. 出土遺物

SX02出土遺物

1は瓦質土器で、器種は火鉢あるいは風炉と考えられる。内面はミガキ調整、口縁の上面は研磨、外面の突帯は貼り付ける際にナデによって密着させる。15～16世紀。2は青磁碗。高台は直径3.8cm。3は瀬戸・美濃焼・灰釉鉢。外面と底部はヘラケズリ、内面はロクロナデ調整を行った後施釉する。復元口径12.4cm、器高4.0cm。釉は淡黄色を呈する。

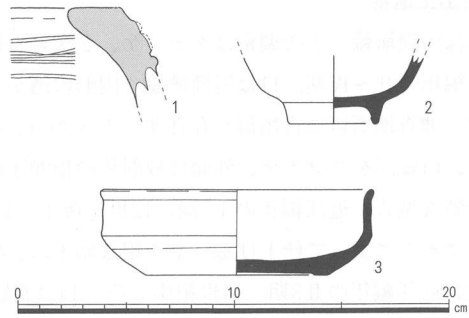


図9 SX02出土遺物実測図 (S=1/3)

SX03出土遺物

4は瀬戸・美濃焼の折縁皿である。見込みは露胎し、底部には輪ドチンの痕跡が認められる。口径は復元12.0cm、器高は2.4cm。大窯の第4段階後半で16世紀末17世紀初。5は瓦質土器摺鉢。底部は離れ砂、体部下半はユビオサエによって成形し、口縁部はヨコナデ調整によって強く外反する。焼成は良好で、色調は灰白色。佐藤編年のG期。16世紀末から17世紀前半。6は土師質の羽釜である。菅原分類の大和I₂型で、川口編年のⅢ2型式。胎土は密で、タタキによって成形し、口縁部をヨコナデする。鏝は貼り付けたのち、ヨコナデによって接着する。焼成は良好で、色調は灰白色。17世紀前半。7は左三つ巴文軒丸瓦で、凸面はナデ調整、凹面は糸切痕跡と布目が認められる。瓦当裏面はナデ調整。16世紀後半。8は左三つ巴文の軒丸瓦。瓦当裏面はナデ調整。9は均整唐草文の軒平瓦。凹凸面とも板ナデによって仕上げる。

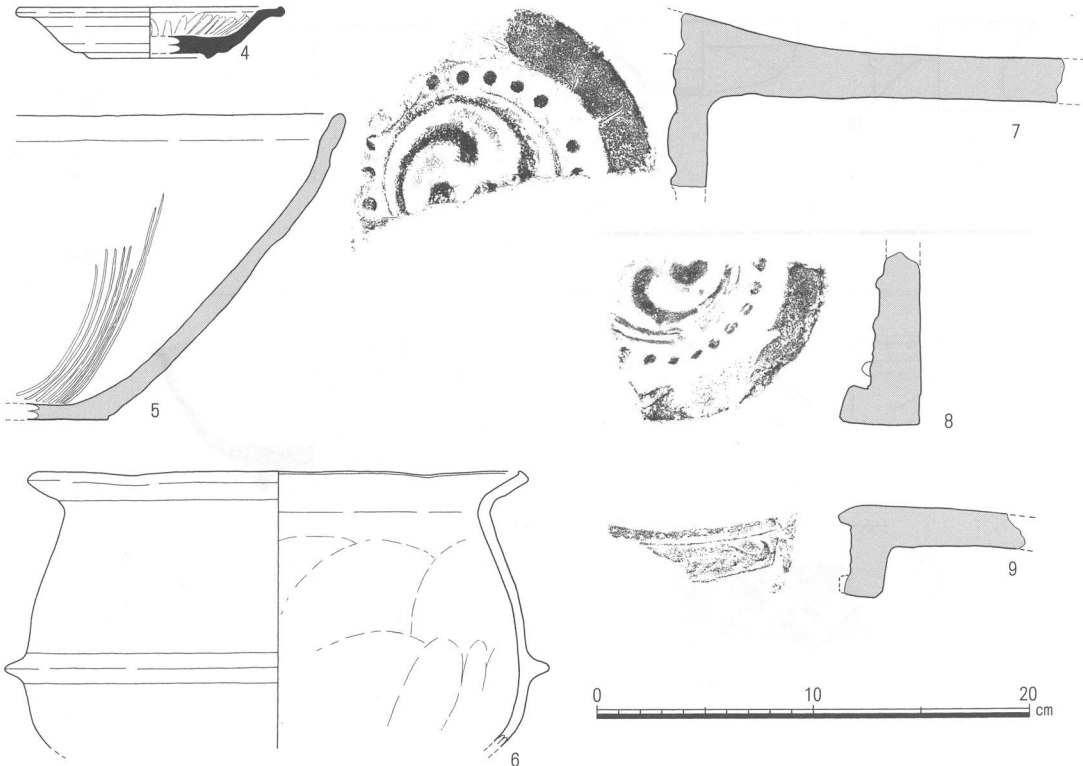
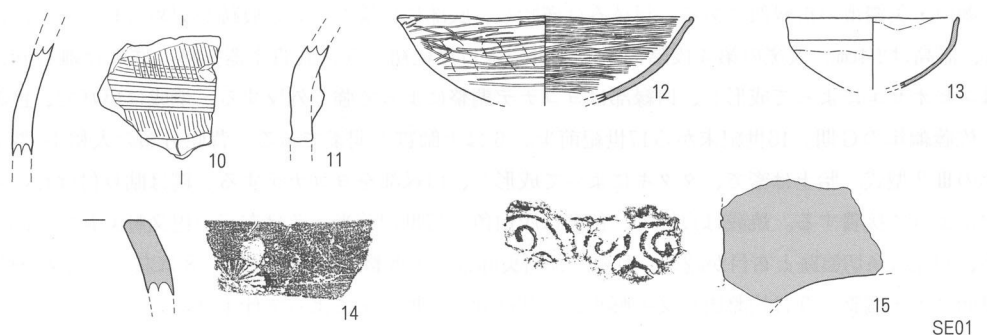


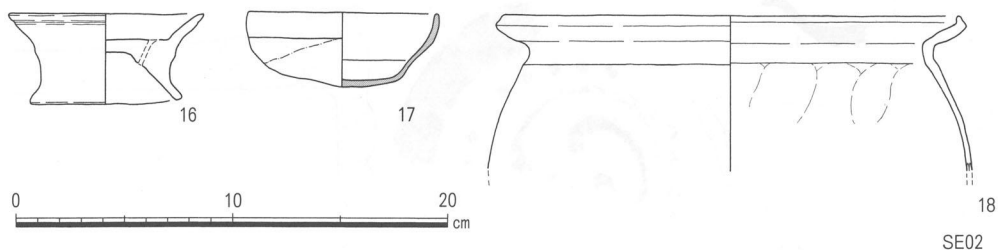
図10 SX03出土遺物実測図 (S=1/3)

SE01出土遺物

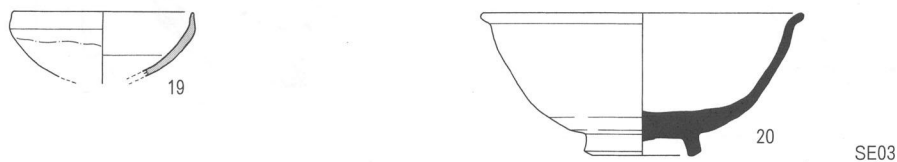
10は円筒埴輪。1次調整はタテハケ、2次調整はヨコハケ。内面はナデ調整。色調は明赤褐色を呈する。川西編年のⅡ～Ⅳ期。11は円筒埴輪。円形の透かしが若干残る。断面台形のタガを貼り付ける。川西編年のⅤ期。調査地周辺に古墳群が存在することから、混入したものと考えられる。12は瓦器碗。口径は復元13.6cmで、口縁部をヨコナデ、外面は放射状の指頭圧痕が認められ、外面上半と内面はミガキ調整。川越編年のⅢ段階A型式、近江編年のⅠ5期。12世紀後半。13は瓦器碗。復元口径7.8cmで、体部をユビオサエ、口縁部をヨコナデによって仕上げる。やや粗な胎土に、焼成は不良で灰白色の色調を呈する。川越編年のⅣ段階C型式、近江編年のⅡ3期。14世紀中ごろ。14は瓦質土器火鉢。内面はヨコナデ調整、外面は研磨によって仕上げる。外面には菊花文のスタンプを押印する。15は軒平瓦。瓦当文様は均整唐草文で、8世紀前葉～中葉。



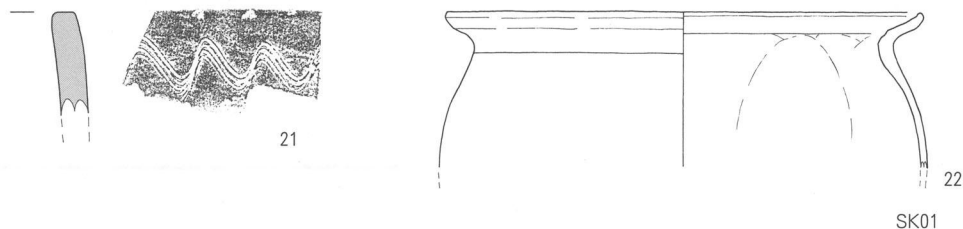
SE01



SE02



SE03



SK01

図11 第2トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

SE02 出土遺物

16は土師器の高台皿。底部には2箇所穿孔がある。17は瓦器椀。川越編年IV段階D型式。14世紀中頃。18は土師質羽釜。菅原分類の大和I₂型、川口編年のIII-2型式。17世紀初頭。

SE03出土遺物

19は瓦器椀。川越編年IV段階C型式。14世紀中ごろ。20は中国製青磁碗。

SK01出土遺物

21は瓦質土器の火鉢である。外面には4条の波状文を刻む。22は土師質の羽釜。菅原分類の大和I₂型。川口編年のIII2型式。

SD01出土遺物

23は瀬戸・美濃焼の天目茶碗(E類)。大窯第3段階後半。16世紀後半。24は瓦質土器の三足火鉢。桜花文のスタンプを等間隔に押印する。25は土師質の羽釜。菅原分類の大和I₂型、川口編年のIII1型式。16世紀後半。口縁と鏝の間には、焼成後に直径4cm程度の円形の孔を穿つ。

SK02出土遺物

26は瓦器椀である。口径は復元10.0cm。III-E型式, 13世紀末~14世紀初。27は灰釉陶器碗。9世紀代か。28は土師質の羽釜で、菅原分類のH₁型。鏝より下には使用時の煤が付着する。

SK04出土遺物

29は瓦器椀。口径は復元12.2cm。川越編年のIII段階C型式。近江編年のI7期。13世紀中頃~第3四半。30は土師質の羽釜で、菅原分類のH₁型。31は土師質の羽釜で、菅原分類のH₁型。30、31のいずれも鏝より下には使用時の煤が付着する。(長谷川)

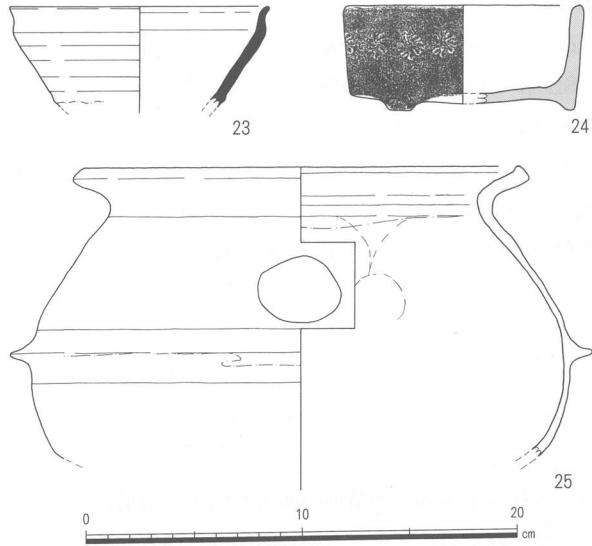


図12 SD01出土遺物実測図 (S=1/3)

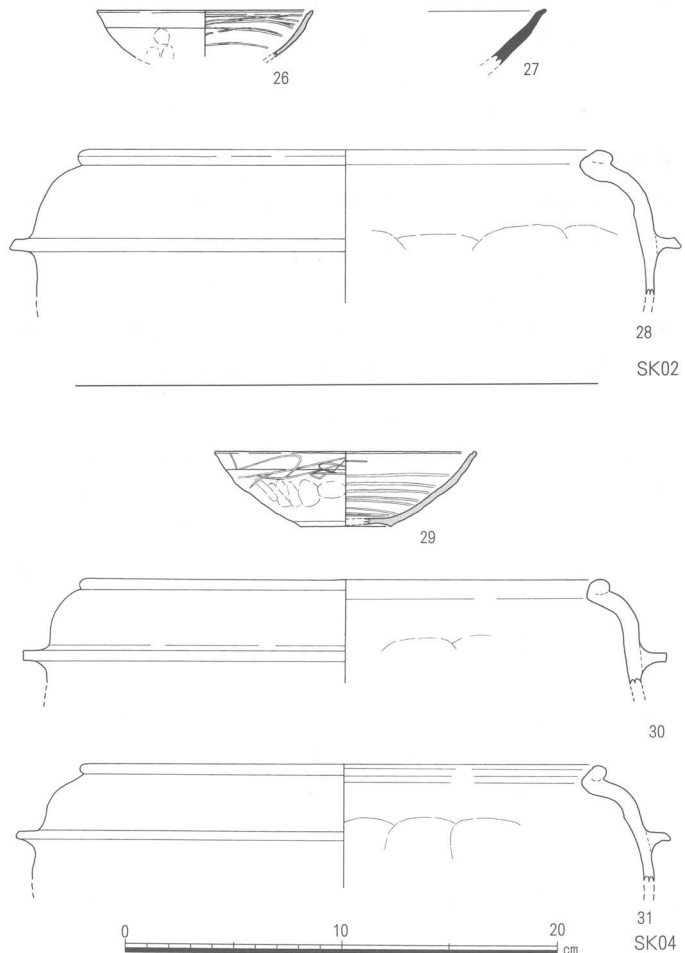


図13 第3トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

5. まとめ

第5次調査で検出された遺構は大きく二つの時期に分けることができる。13世紀後半～15世紀前半の中世遺構（SE01, SE03, SK02, SK04）と、16世紀後半～17世紀前半の室町末期、桃山・近世期の遺構（SX03, SE02, SK01, SD01）である。

これまでの境内地での第8次調査では、13世紀初頭の大規模な整地が認められ、さらに13世紀中葉～後葉に整地の可能性が指摘され、また、室町後期、近世初頭の二時期の盛土が認められるという。今回の調査でも境内地の様相とよく似た時期の遺構が検出されたことから、中近世期における再興の様子が徐々に判明してきたといえるかもしれない。

特にSD01はかつて存在した土塁の西側にうがたれた溝で、今回第2次調査に引き続いて検出したものである。2次調査では室町～江戸時代という年代が与えられていたが、今回の調査で16世紀後半にうがたれた可能性が高くなった。このことは現在の境内地西側の土塁の築造時期をより絞り込み、寺院の再興時期を特定するうえで重要な知見とすることができる。

一方で古代～中世期の伽藍地の西辺を画する遺構については検出されなかった。したがって、多くの検出遺構が寺院の経営や止住する寺僧に直接的に係るものかどうか、中世期の寺院の範囲をどう捉えるかという問題ともあいまって今後の検討が必要である。また、「額田寺伽藍並条里図」から知れる奈良時代の伽藍地の範囲についてもその現地比定が確定しているわけではないが、当時の諸院は伽藍地の東南方に広がっており、今回の調査地での古代の遺構が検出されていないのは、絵画資料に描かれた状況と符合しているのかもしれない。（服部）

<参考文献>

- 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2』愛知県, 2007
近江俊秀「大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号, 1991
川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』VI, 1990
川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』, 1983
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号, 1978
佐藤亜聖「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI, 1996
菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』, 1983
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社, 1995



写真1
調査前全景（南から）

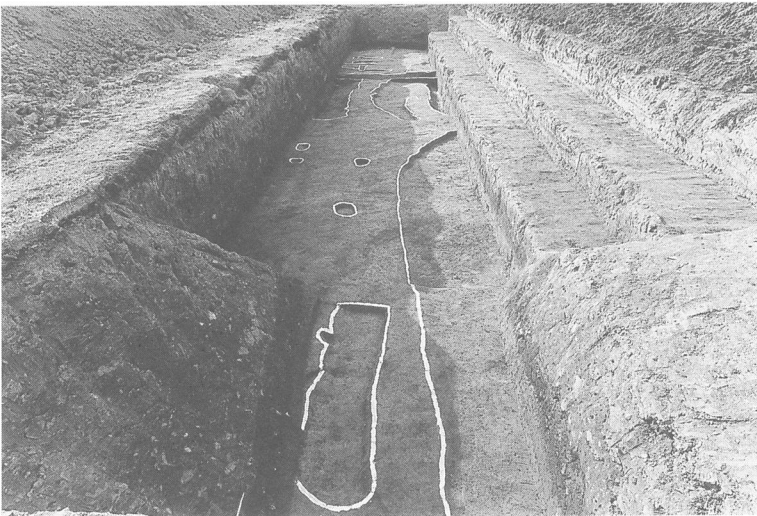


写真2
第1トレンチ（東から）



写真3
第1トレンチ（西から）

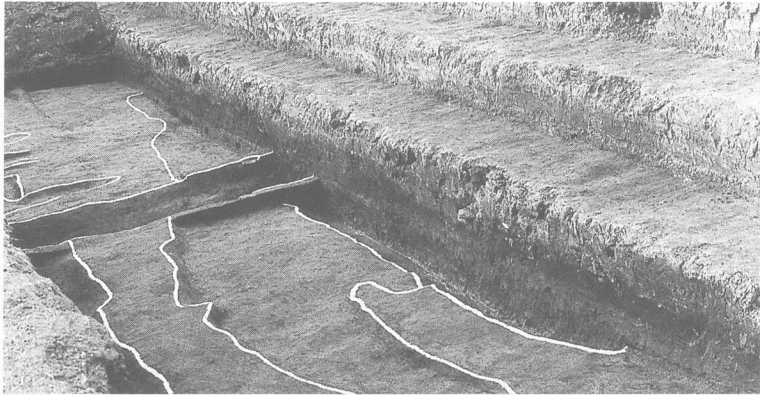


写真 4
SX02 (南東から)



写真 5
SX03 (西から)



写真 6
SX03 (北西から)



写真7
第2トレンチ全景（東から）



写真8
第2トレンチ全景（西から）

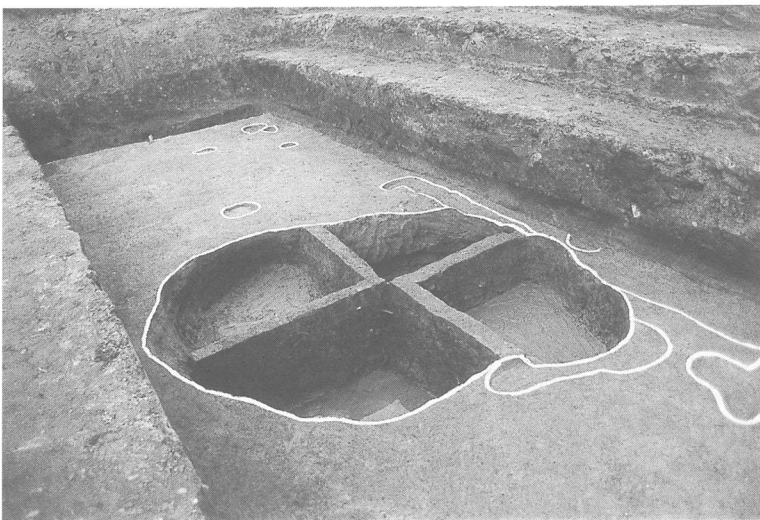


写真9
第2トレンチSE01（北西から）



写真10

第2トレンチSE02・03

(西から)

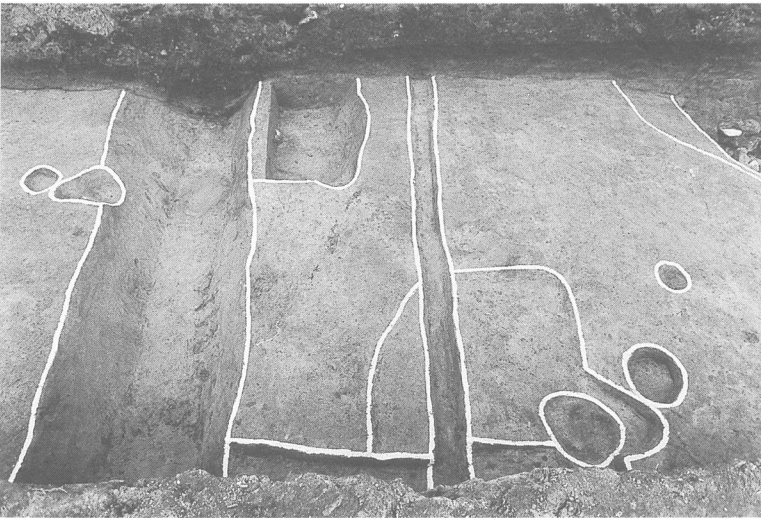


写真11

第2トレンチSD02・SK01

(北から)



写真12

第2トレンチSE02 (北から)



写真13
第2トレンチSE03（西から）



写真14
第3トレンチ（東から）

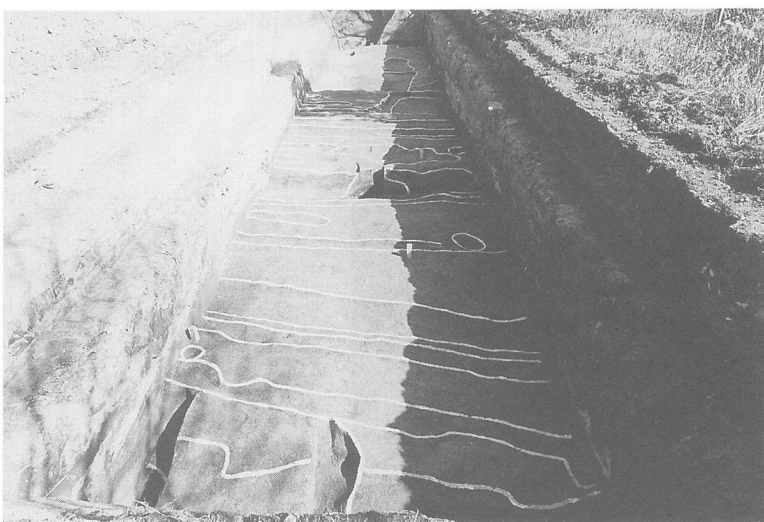


写真15
第3トレンチ（西から）



写真16

第3トレンチSD01 (北から)



写真17

第3トレンチSE04・SK02
(北から)

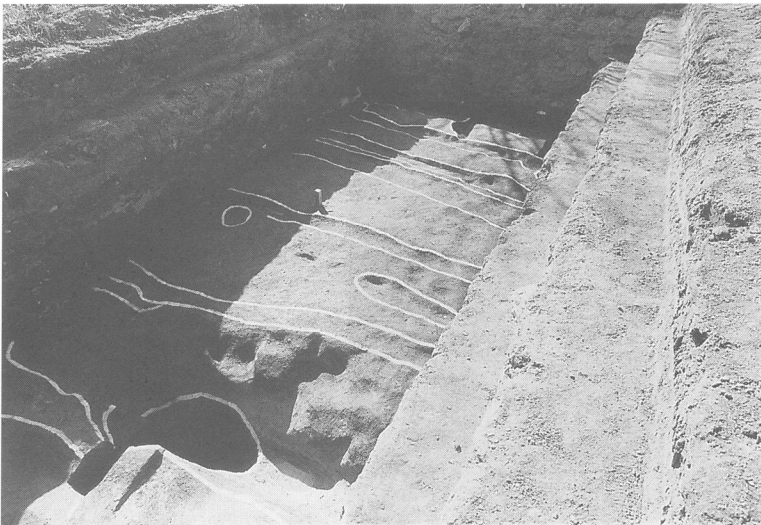


写真18

第3トレンチSK04 (北東から)



写真19
第7次調査調査前全景
(南東から)



写真20
トレンチ全景 (南東から)



写真21
トレンチ全景 (北東から)

写真22 出土遺物（1）

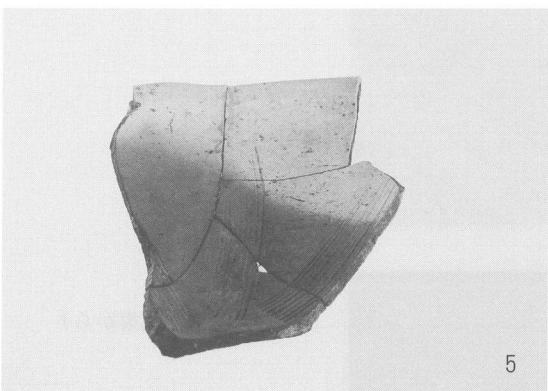
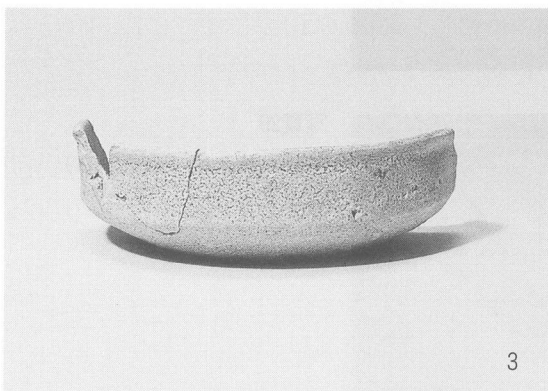
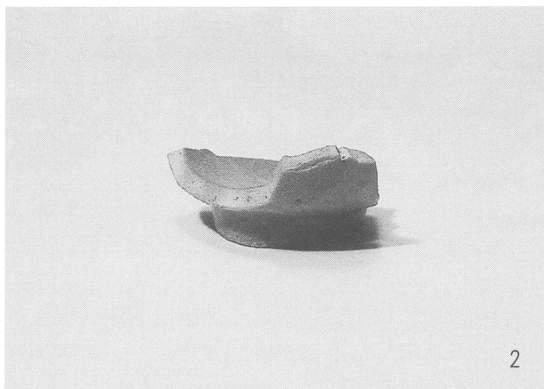
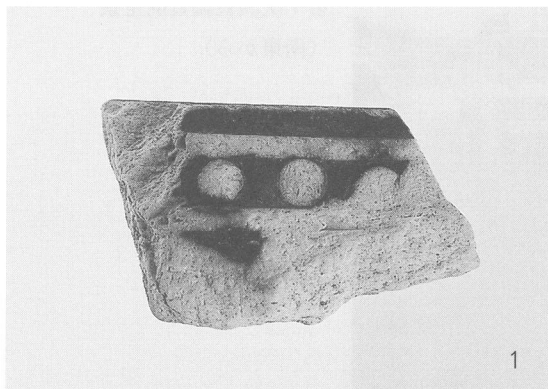


写真23 出土遺物（2）

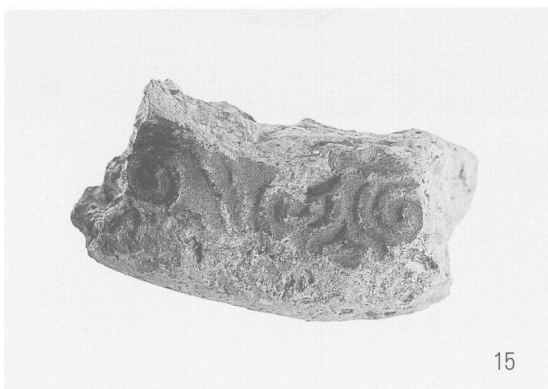
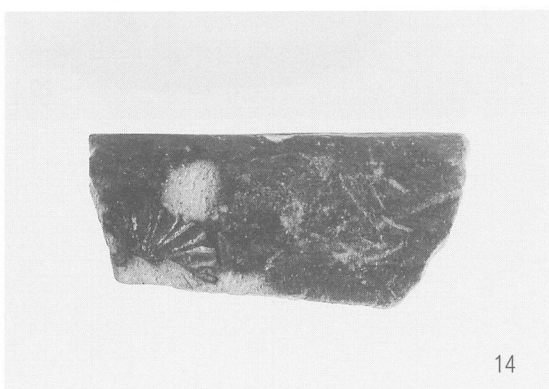
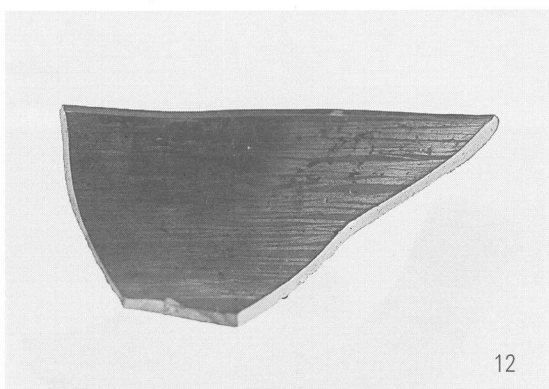
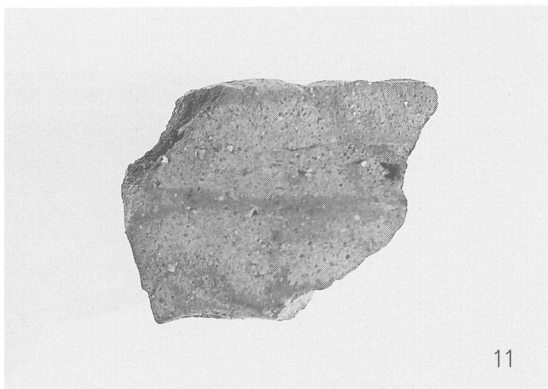
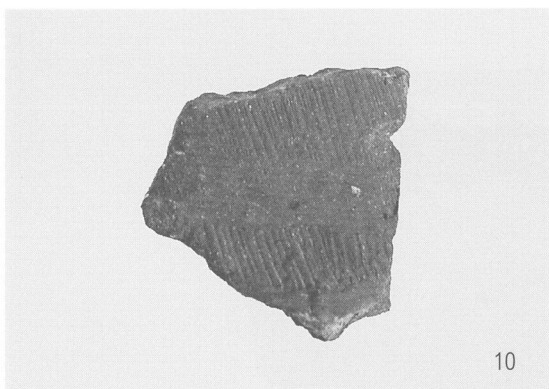
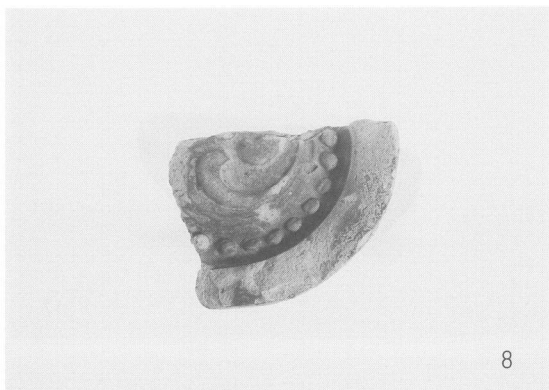


写真24 出土遺物（3）

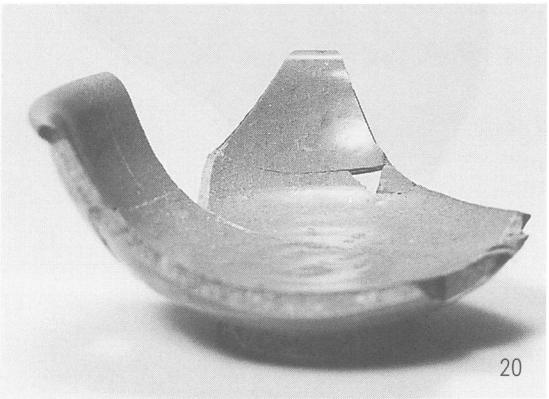
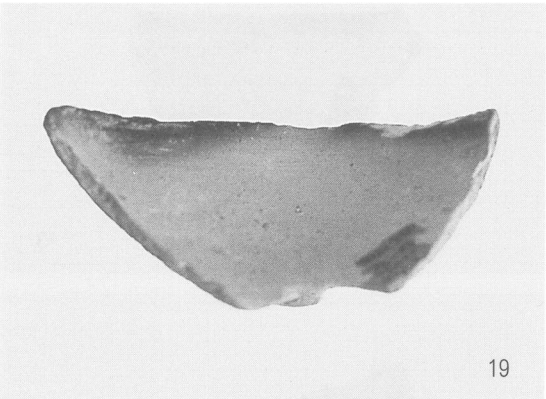
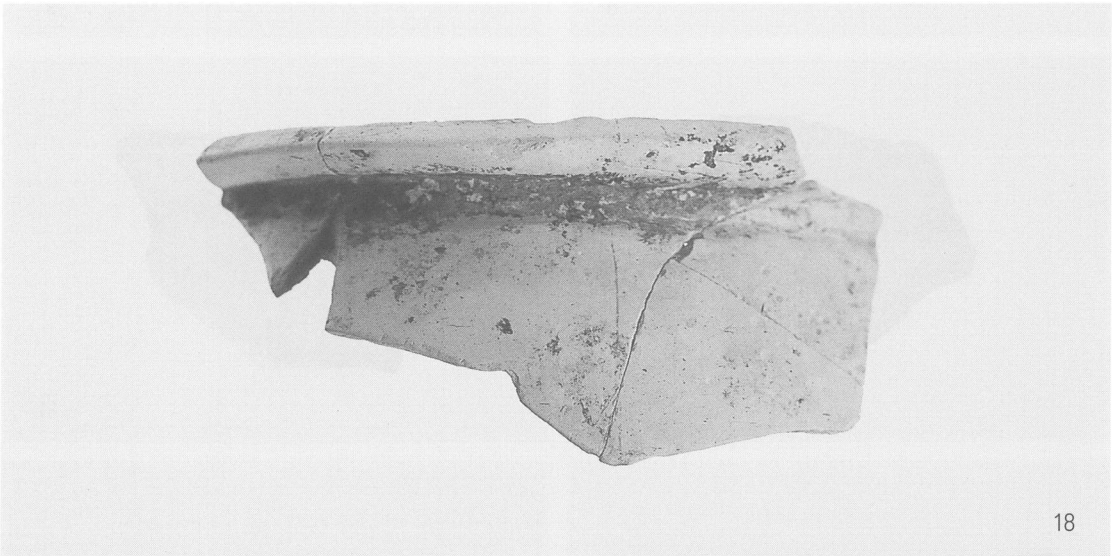
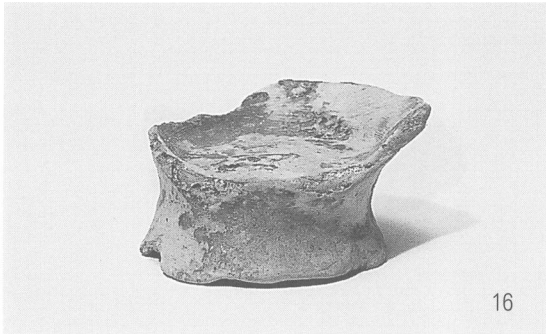


写真25 出土遺物(4)

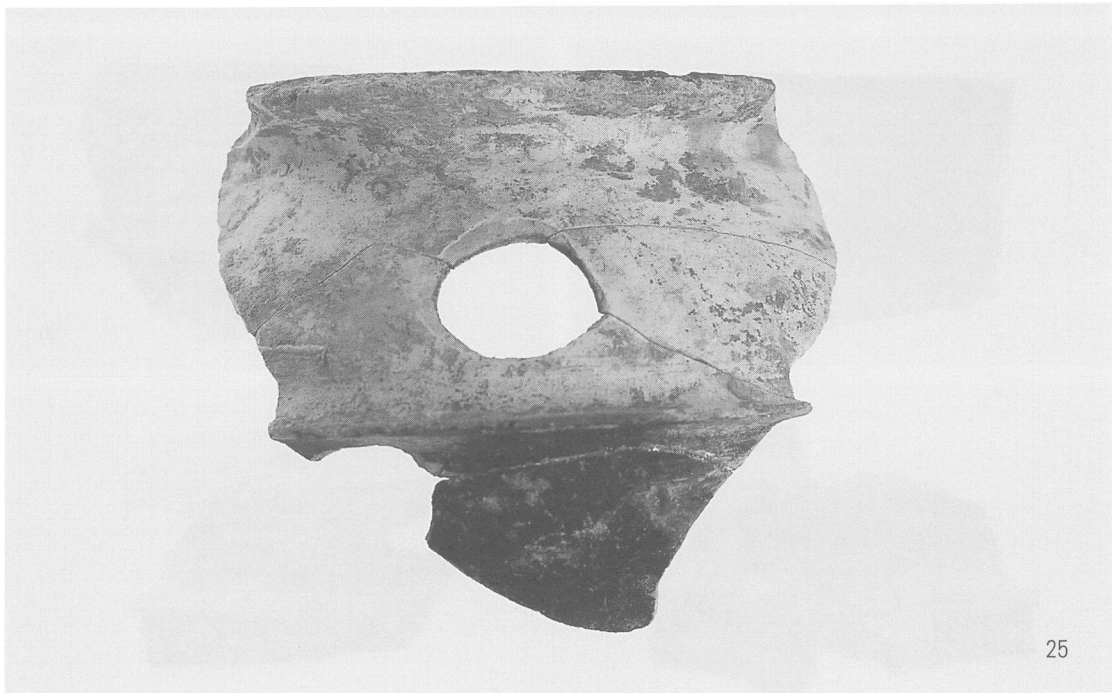
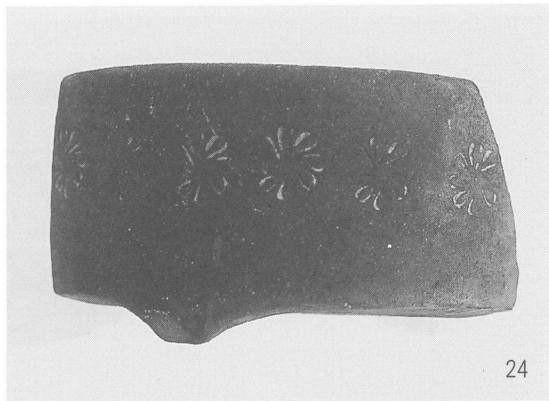
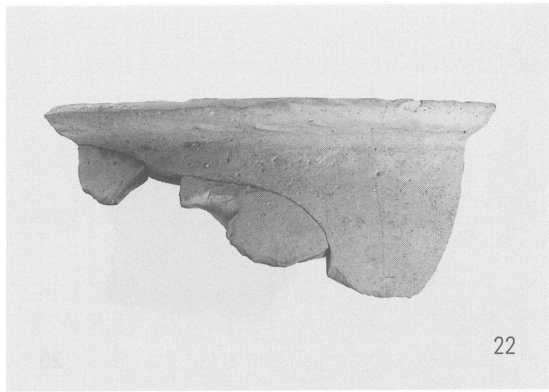
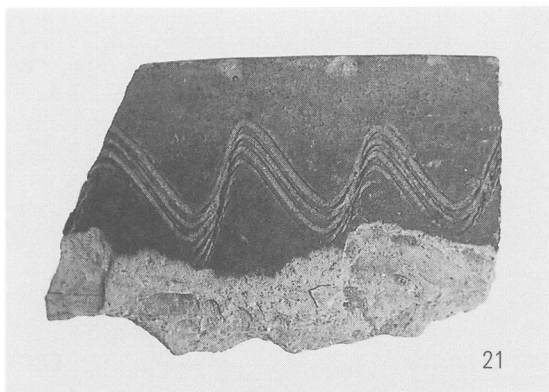
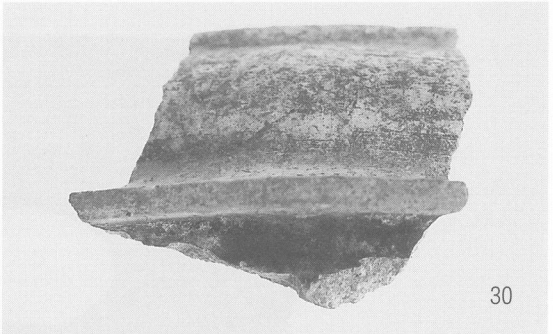
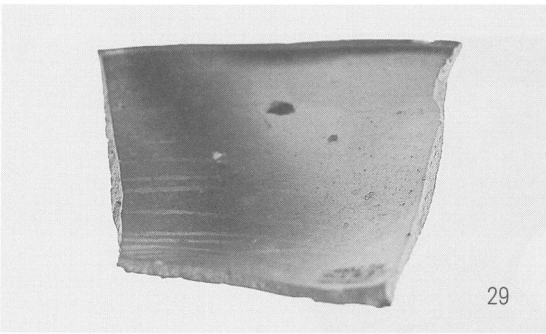
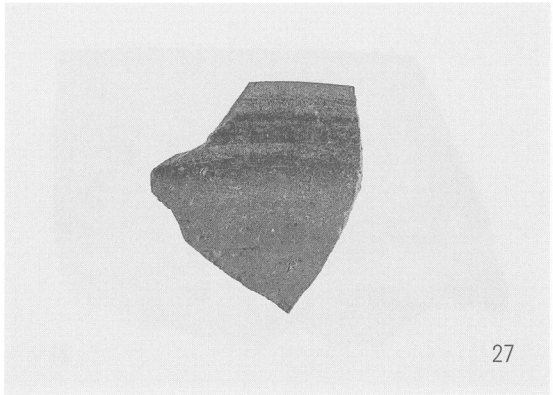
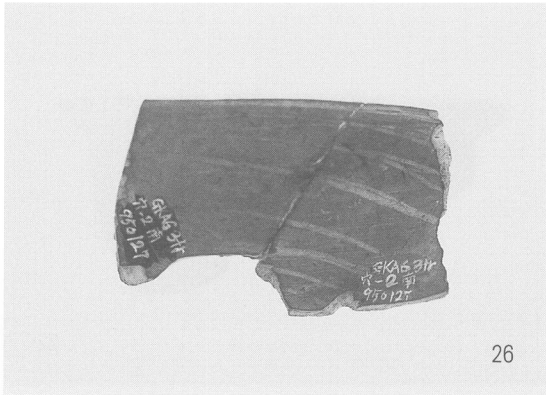


写真26 出土遺物 (5)



Ⅱ 郡山城第43次

1. 調査の契機と経過

郡山城の調査はこれまで下表のとおり64次にわたり実施されている。城郭の中心部だけではなく、町屋地帯や武家屋敷地においても調査を重ねている。

平成8年4月、宗教法人柳澤神社から、老朽化した社務所の建替えに伴う現状変更等許可申請書が提出された。柳澤神社は柳澤吉保を祭神として明治13年に創立されたもので、郡山城の本丸に位置している。申請書を受けた県教育委員会は、事前の発掘調査の実施等を条件として許可をおろした。その指令を受けて本市が調査を実施したものである。(服部)

郡山城の発掘調査一覧

調査回数	調査地	郭名等	調査機関	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
1	城内町257	緑郭	橿原考古学研究所	1997.10.15～10.27	200	県立城内高校グラウンド造成
2	朝日町516 ほか	三の丸	橿原考古学研究所	1982.10.12～12.26	1000	マンション建設
3	城内町253-1	法印郭(追手門)	橿原考古学研究所	1983.1.10～2.22	700	追手門復元
4	朝日町516 ほか	三の丸	橿原考古学研究所	1983.6.12～8.10	2200	マンション建設工事
5	植槻町3-11	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1983.11.10～11.12	120	市総合福祉施設建設工事
6	城内町254-1 ほか	毘沙門郭	大和郡山市教育委員会	1983.12.21～12.26	13	(財)柳沢文庫収蔵庫建設
7	城内町253-2 ほか	法印郭(追手東隅櫓)	大和郡山市教育委員会	1984.1.23～3.8	300	追手東隅櫓復元建築工事
8	城内町254-1 ほか	毘沙門郭(追手向櫓)	大和郡山市教育委員会	1984.8.8～8.25	100	追手向櫓復元建築工事
9	朝日町57	三の丸	橿原考古学研究所	1985.6.19～7.24	500	マンション建築
10	北郡山町275 ほか	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1996.5	120	レストラン弁慶増築
11	城内町2-45	法印郭・緑郭	橿原考古学研究所	1996.6.20～7.18	802	県立城内高校セミナーハウス建設
12	城内町254-1 ほか	毘沙門郭(追手向櫓)	大和郡山市教育委員会	1986.6.28～8.2	400	追手向櫓復元建築, 第8次の本調査
13	城内町1-26	二の丸屋形	橿原考古学研究所	1987.7.3～8.5	298	県立郡山高校校舎増築
14	北郡山町210	五軒屋敷	大和郡山市教育委員会	1987.11.25～12.5	260	都市計画街路三の丸線建設
15	南大工町内	外堀	大和郡山市教育委員会	1988.1.28	100	外堀緑地公園
16	朝日町1-62	三の丸	大和郡山市教育委員会	1988.8.4～8.24	180	大和郡山市総合病院改築
17	藤原町4-18-20	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1988.10.3～10.7	300	大和郡山市総合病院看護婦宿舎
18	南郡山町520-1 ほか	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1988.3.28	60	店舗テナントビル建設
19	中鍛冶町24-2 ほか	町人地	大和郡山市教育委員会	1989.5.9～5.10	69	マンション建設(リクルート)
20	北郡山町306-1	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1989.8.7	50	宅地造成(西谷喜宣)
21	冠山町630-3	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1989.7.24	48	マンション建設(吉村知之)
22	植槻町6-10	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1989.10.11～11.14	180	大和郡山市水道局庁舎建設
23	城内町2-45	麒麟郭	橿原考古学研究所	1989.9.18～10.18	1350	県立城内高校体育館建設
24	城内町253-1	法印郭	大和郡山市教育委員会	1989.10	5	タイムカプセル埋設(市青団協)
25	北郡山町114-1	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1989.11.15～11.20	120	貸倉庫建設(大東建託)
26	北郡山町130	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1990.6.11	68	ガソリンスタンド建設(大新商事)
27	北郡山町152-3	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1990.8.20	45	アパート建設(勝村久嗣)
28	朝日町1-62	三の丸	大和郡山市教育委員会	1990.1.16	12	大和郡山市総合病院改築

29	城内町255 ほか	天守郭	大和郡山市教育委員会	1991.2.15～2.16	20	柳沢神社社務所改築
30	城内町1-26	二の丸屋形	橿原考古学研究所	1991.9.10～10.9	200	県立郡山高校校舎改築
31	城内町252-1	陣甫郭	大和郡山市教育委員会	1991.9.9	18	個人住宅新築
32	藤原町478-1	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1991.10.20	70	事務所建設
33	天理町683	外堀	大和郡山市教育委員会	1991.5.1～7.1	440	福祉施設駐車場・進入路
34	城内町1-26	二の丸屋形	橿原考古学研究所	1992.10.20～10.23	100	県立郡山高校同窓会館建設
35	城南町372-1 ほか	町人地 (矢田筋)	大和郡山市教育委員会	1993.2.1～3.2	120	マンション建設 (杉田正義)
36	南郡山町464-1 ほか	久松寺跡	大和郡山市教育委員会	1993.4.5～4.30	400	スーパーマーケット建設 (往西啓治)
37	永慶寺町284-1 ほか	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1993.11.24～1994.1.31	700	宅地造成 (ファーストホーム)
38	南郡山町623	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1994.1.8～1.24	325	宅地造成 (大阪労住生協)
39	城南町2-13	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1994.3.7	60	病院建設 (田北病院)
40	南大工町1-13	町人地	大和郡山市教育委員会	1994.5.9～9.9	260	老人ホーム建設
41	材木町4 ほか	町人地	大和郡山市教育委員会	1995.8.21～8.23	125	マンション建設 (吉本工務店)
42	城南町379-1 ほか	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1995.9.5	115	分譲住宅 (コスモ住建)
43	城内町255 ほか	天守郭	大和郡山市教育委員会	1996.6.27～7.13	77	柳沢神社社務所建設
44	城内町252-1	陣甫郭	大和郡山市教育委員会	1997.6.23～6.26	25	個人住宅 (浦野博司)
45	紺屋町・新紺屋町内	町人地	大和郡山市教育委員会	1998.3.10～5.16	500	藪町線街路工事
46	北郡山町244-1 ほか	五軒屋敷	大和郡山市教育委員会	1998.4.20～5.8	108	商工会館建設
47	城内町2-45	麒麟郭	橿原考古学研究所	1998.5.22～6.10	125	県立城内高校格技場建設
48	北郡山町244-1 ほか	五軒屋敷	大和郡山市教育委員会	1998.5.11～7.10	540	文化総合施設建設 (試掘)
49	紺屋町19	町人地	大和郡山市教育委員会	1998.5.20～7.10	50	奥野家住宅整備事業
50	北郡山町244-1 ほか	五軒屋敷屋敷	大和郡山市教育委員会	1998.10.12～1994.4.16	2,300	文化総合施設建設 (本調査)
51	城内町	二の丸屋形	橿原考古学研究所	1999.1.11～2.10	300	県立郡山高校格技場建替
52	北郡山町108-2	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1999.7.5～7.12	100	森精機(株)寮建設
53	北郡山町311-2 ほか	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	1999.9.20～9.23	86	マンション建設 (峠木材)
54	紺屋町 ほか	城下町	大和郡山市教育委員会	2000.6.5～7.13	210	藪町線街路工事
55	南郡山町211-9 ほか	城下町	大和郡山市教育委員会	2002.2.12～2.22	100	南都銀行郡山支店建替
56	代官町333・348	外堀	大和郡山市教育委員会	2002.6.11～6.24	60	特定保水池事業
57	北郡山町309・310	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	2003.5.28	18	グループホーム (藤村病院)
58	冠山町598-6	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	2003.10.5～10.31	250	霞ヶ丘建替団地
59	冠山町598-6	武家屋敷地	大和郡山市教育委員会	2004.10.25～11.30	180	霞ヶ丘建替団地
60	城内町2	中堀	橿原考古学研究所	2005.7.19～7.29	50	大和郡山斑鳩線交通安全施設整備事業
61	城見町546-2 ほか	三の丸	大和郡山市教育委員会	2006.4.17・18, 6.19～7.10	120	マンション建設 (フクダ不動産)
62	北郡山町174-6 ほか	城下町	大和郡山市教育委員会	2006.6.12～7.24	168	藪町線街路工事
63	柳一丁目20番地	町人地	大和郡山市教育委員会	2007.2.16～2.23	76	事務所建設 (京都銀行)
64	柳一丁目14-1	町人地	大和郡山市教育委員会	2007.7.25～8.8	103	マンション建設 (日本ベルアーヂュ)

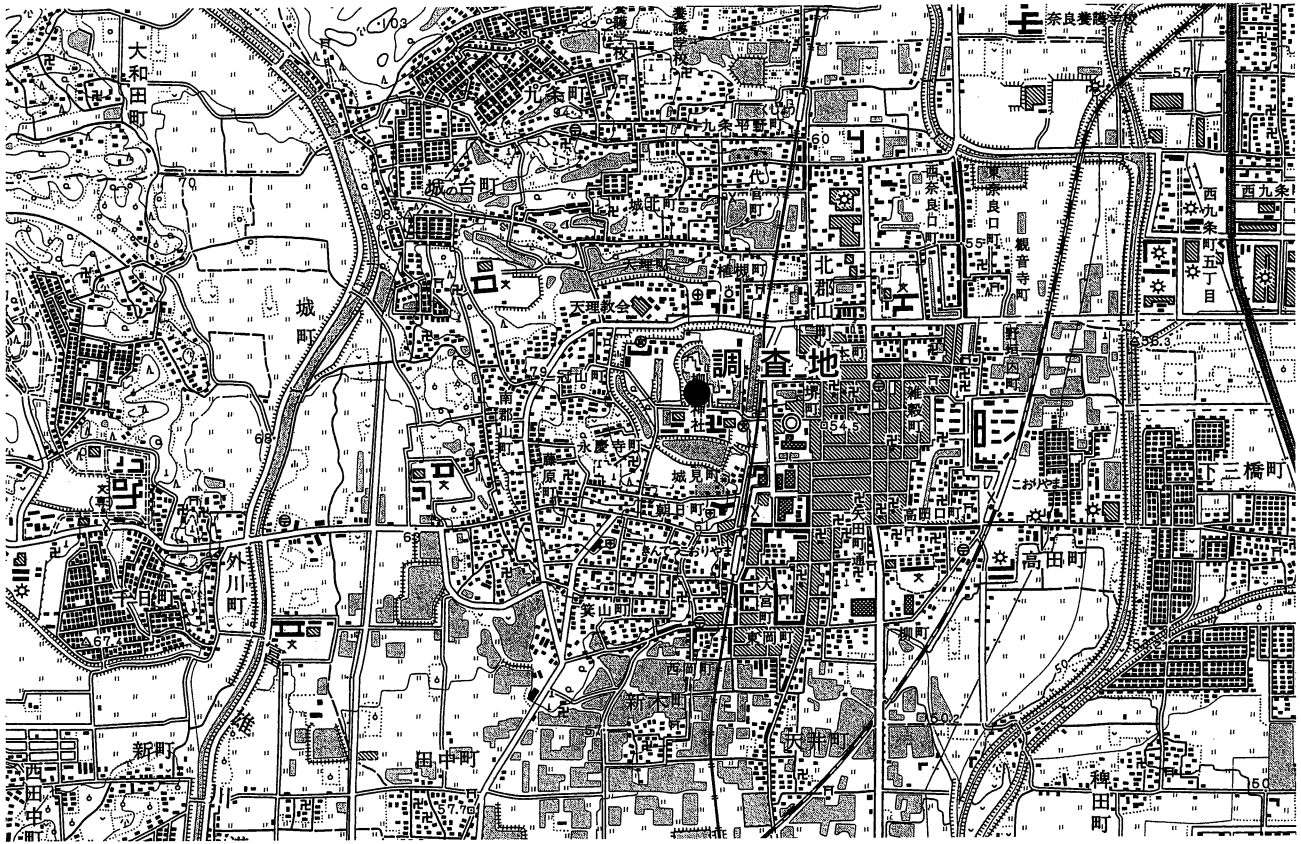


図14 調査地位置図 (S=1:25,000)

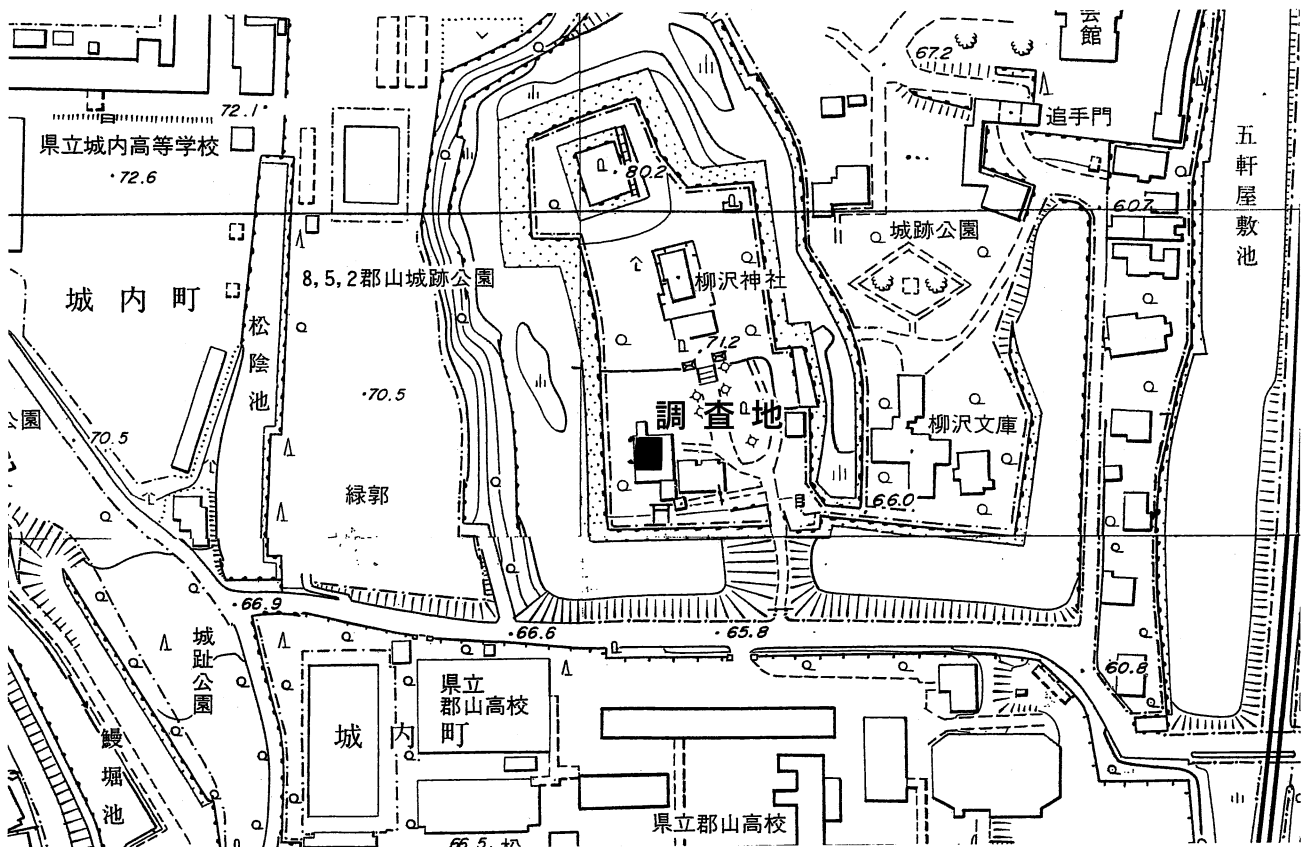


図15 調査地位置図 (S=1:2,500)

2. 郡山城第43次発掘調査

調査は社務所建設予定地に11m×7mの調査区を設け、重機により表土から掘削を開始、遺構の存在を確認した層位にて掘削を止め、人力による遺構の検出を行った。遺構は表土直下に認められ、重機での掘削深度は10～20cmであった。

おもな検出遺構は、硬く突き固められた黄褐色土の整地層、これは調査区北東部に遺存していた。この整地層上では土壌、溝等の遺構が検出されている。整地層の西側には一辺50cmから拳大の石によって囲まれた池状遺構が存在する。この遺構は直径5mの円形をなす。池の埋土からは近代の遺物が包含されている。おそらく今回解体された旧社務所より以前の建物、伝聞では火災により明治時代に消失したとされる建物に伴う池と思われる。整地層と池の南側は脆弱な盛土があり、その脆弱さを補うための集石が4カ所で認められた。この盛り土は旧社務所建設の際に行われた整地と考えられる。

整地層は全体の南西隅を確認し、検出した範囲で東西長3.5m、南北長6.5mを計る。整地層の南西隅で近代以降の盛土を除去した結果、この整地層がかなり急に立ち上がることが確認でき、また、土層観察から立ち上がりも含めて表面を粘土層で被覆していることがわかった。このことから、この整地層は建物基壇として構築されたものと考えられる。しかしながら、整地層上で建物の痕跡を認めることはできず、いかなる性格のものであるかを断定するには至っていない。

整地層上で検出された近世以前の土壌は4カ所あり、そのうちの2カ所は炭化物と大量の土師器皿を包含するもので、整地層最上面の粘土層に被覆されていた。SX01は整地層南端から北へ伸びる楕円形の土壌で長径3m、短径1.3mを計る。断面形態は逆台形を呈し、敷き詰めるようにU字状に厚さ15cmの炭化物と土

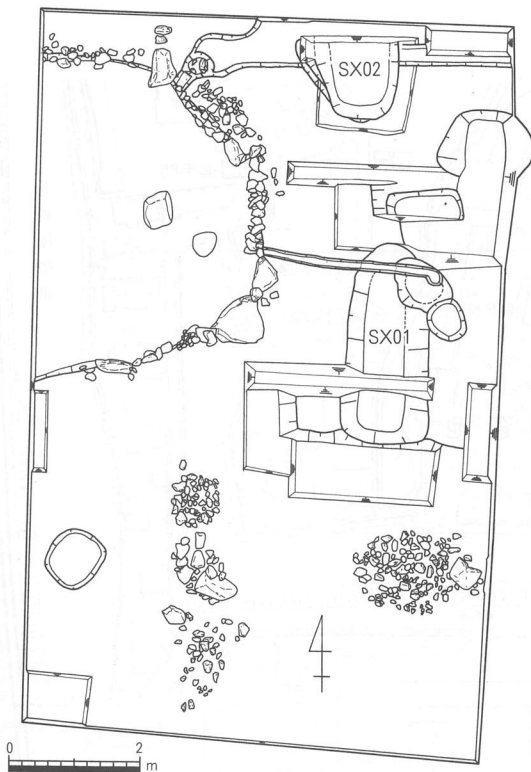
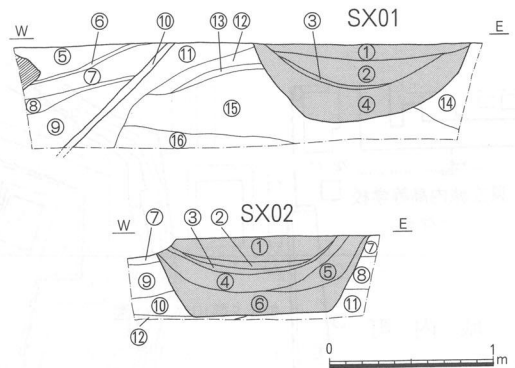


図16 トレンチ平面図



SX01

- ① 暗黄褐色土
- ② 黄灰白色砂
- ③ 黄白色粘質土
- ④ 炭層
- ⑤ 黄橙色砂礫
- ⑥ 灰色粘質土
- ⑦ 黄白色砂
- ⑧ 灰色土
- ⑨ 灰白色砂
- ⑩ 褐色土
- ⑪ 黄色土
- ⑫ 黄灰白色砂
- ⑬ 灰白色粘土
- ⑭ 黄橙色砂混土
- ⑮ 黄灰白色粘質土
- ⑯ 淡灰色砂

SX02

- ① 灰褐色砂
- ② 黄灰白色砂
- ③ 灰色土
- ④ 灰白色粘土
- ⑤ 暗褐色土
- ⑥ 炭層（炭混暗灰色土）
- ⑦ 淡褐色砂礫
- ⑧ 橙灰白色粘土
- ⑨ 橙色粘質土
- ⑩ 灰色砂礫
- ⑪ 灰褐色土
- ⑫ 白色粘土

図17 SX01・02断面図

師器皿を混じる層がある。この層の中央の凹みには白色の砂を充填している。SX02も同様の遺構で調査区北端で一部を検出した。検出した長径は1.2m、短径1.3mを計る。そのほかの土壌はSX01を切り込んでおり、SX01より新しいものであるが、出土遺物から時間差の小さいほぼ同時期のものである。

このほかに整地層内に厚さ5cm程度の炭化物層が存在する。この層は西から東へ傾斜し、ほぼ完形の土師器皿を包含する。炭化物層の上層はSX-01と同様に白色砂で粘土層に被覆されていた。基壇構築過程で何らかの目的のために埋設したものとみられる。

出土遺物の大半はSX01・02から出土した土師器皿である。この皿には大きさによって3種類に分けられ、大きいものは直径15cm、中のもは直径10cm程度、小さいものは直径8cm程である。同遺構からは他に磁器染付碗、天目茶碗、瓦質播鉢が少量出土している。整地層内の他の層からも量は多くないが、同様の遺物の出土が認められる。

これまで、郡山城本丸地域での発掘調査は小規模ながら過去にも行われていたが、明確な遺構を検出するには至っていない。今回、郡山築城に前後すると思われる時期の遺構を確認したことは、貴重な成果と言える。また、炭化物層に包含される大量の土師器皿の意味については検討を要するが、地鎮に伴う祭祀と見ることが妥当と思われる。この祭祀が築城工事に伴うものか、あるいは基壇状遺構上にあったとされる建物に伴うものかは遺物の年代観によって左右されるが、可能性として両者を指摘しておきたい。(濱口)

3. 出土遺物

整地層内黄白色砂層出土遺物

1は土師質の小壺。口径は6.1cm, 器高は2.8cm。胎土は雲母を若干含むものの非常に精良で, 底部を内外面ともユビオサエ調整, 口縁部をヨコナデ調整によって成形する。焼成は良好で, 色調は浅黄橙色を呈する。完形で出土。

2(写真2)は中国製染付磁器碗(I₂群)である。輪花端反の碗で, 意匠は破片のため不明である。3は同じく中国製染付碗(E群)である。底部は饅頭心に盛り上げ, 人物(官人)を描く。高台の径は3.2cm。焼成は良好, 釉はやや白濁する。16世紀後半。

4は軒丸瓦。瓦当文様は左三巴文で, 郡山城の瓦を分類した服部の179型式, 山川の12A型式に相当する。凸面および瓦当裏面はナデ調整, 凹面には糸切痕跡(コビキA)が残る豊臣期大坂城が出土軒丸瓦と同範である。

5は軒平瓦。瓦当文様は均整唐草文で, 服部の200型式, 山川の102B型式に相当する。法隆寺・元興寺・多聞城などに同文例がある。

整地層内炭化物層出土遺物

6は土師器の大皿。口径17.6cm, 器高2.7cmを測る。胎土は若干雲母を含むものの精良で, 外面をユビオサエ調整, 内面をハケ調整のちナデ消し, 口縁をヨコナデする。焼成は良好で, 色調は灰白色を呈する。

SX02出土遺物

7は瀬戸・美濃焼の天目茶碗。口径は復元10.9cm, 器高は5.3cm, 高台は径4.6cm。高台周辺には錆釉を塗る。大窯第4段階前半のもので, 16世紀末。

8~11は土師器の皿である。8は胎土に雲母を若干含むものの比較的精良で, 底部をユビオサエ, 口縁部をヨコナデによって調整する。焼成は良好で, 色調は浅黄橙色。口径9.8cm, 器高2.1cm。9は胎土に雲母を若干含むものの精良で, 底部をユビオサエ, 口縁部をヨコナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で, 色調は灰白色。口径12.0cm, 器高1.9cm。10は胎土に雲母を若干含むものの精良で, 底部をユビオサエ, 口縁部をヨコナデする。焼成は良好で, 色調は浅黄橙色を呈する。口径9.8cm, 器高2.1cm。11は胎土に雲母を若干含む, 精良である。底部をユビオサエ, 口縁部をヨコナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で, 色調は灰白色を呈する。口径はゆがみが大きく, 最大で13.2cm, 最小で12.2cm。器高は2.4cm。

SX01出土遺物

12は瀬戸・美濃焼の小型天目茶碗である。長石を含むも精良な灰白色の胎土で, 外面底部が露胎する。ロクロナデによって成形し高台を削り出し, 鉄釉を施す。焼成は良好。口径は復元7.0cm, 器高3.75cm, 高台径2.9cmを測る。13は瀬戸・美濃焼の天目茶碗である。精良な胎土で, 底部は露胎する。ロクロナデによって成形し, 高台を削り出す。焼成は良好で, 口径は復元11.2cm, 器高6.0cm, 高台径4.0cmを測る。第4段階前半(16世紀末)。

14, 15は土師器の皿である。いずれも雲母を少量含む胎土で, 底部をユビオサエ調整, 口縁部をヨコナデによって成形する。焼成は良好で, 色調は灰白色を呈する。14は口径10.35cm, 器高2.0cm, 15が口径9.55cm, 器高2.05cmを測る。

16は瓦質土器の摺鉢である。外面をユビオサエによって成形し, 口縁部は強いヨコナデによって外反する。酸化焰焼成により橙色を呈する。佐藤編年のF期で, 16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

17は備前焼摺鉢。ロクロナデにより成形し, 口縁部は外側に肥厚させる。焼成は良好で, 色調は赤褐色を呈する。口径は復元32.2cmを計る。間壁V期・乗岡編年近世1期b。16世紀末。(長谷川)

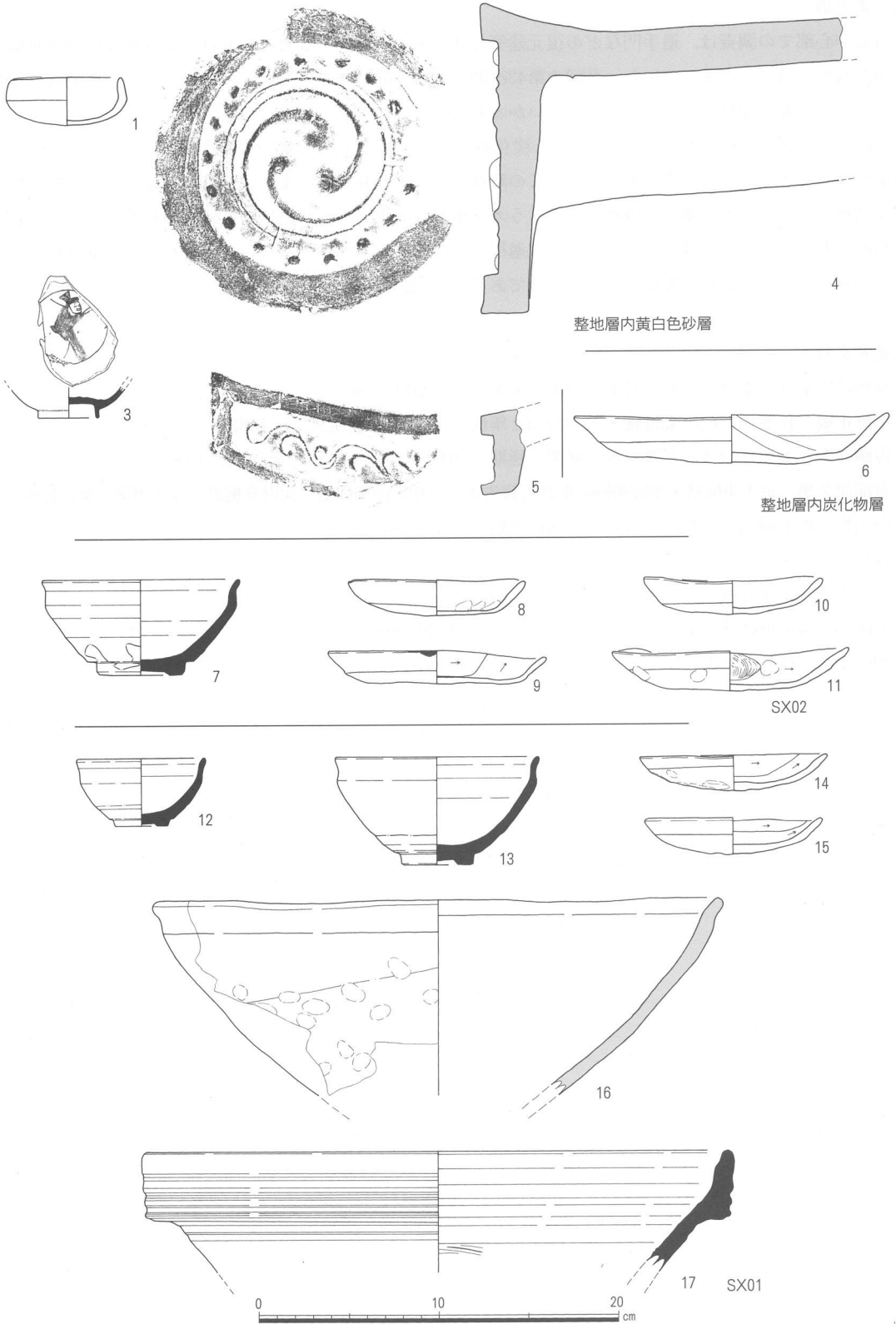


图18 出土遺物実測図 (S=1/3)

4. まとめ

城郭中心部での調査は、追手門などの復元建築に伴う事前調査が主なものであり、調査地は毘沙門曲輪、法印曲輪の一角にとどまっていた。今回の第43次調査は天守曲輪内での初めての調査であり、郡山城の築城にかかわる重要な知見が得られるのではないかと期待された。

検出されたSK01・02は多量の土師器皿と炭化物が含まれ、出土した瀬戸・美濃焼天目茶碗、瓦質播鉢、備前焼播鉢などの年代は16世紀末である。この時期はまさに筒井、豊臣家により築城が開始された郡山城の築城初期に当たり、郡山城の築城過程を知るうえで重要な成果である。整地層が建物の基壇かどうかは慎重な判断を要する。あるいは、天守曲輪の造成過程にかかわるものかもしれない。いずれにせよ築城初期の様相を知る上で貴重な情報を提供したといえるであろう。(服部)

<参考文献>

- 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2』愛知県, 2007
小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2, 1982
佐藤亜聖「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI, 1996
服部伊久男『追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書』大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集, 1993
山川均「郡山城出土の軒瓦について」『織豊城郭』2, 1995
森毅「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア』149, 1995
森田克行『摂津高槻城』高槻市教育委員会, 1984
乗岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000
間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社, 1991



写真27
調査前全景（西から）



写真28
調査風景（西から）



写真29
調査区全景（北東から）



写真30
池（西から）



写真31
SX01（南から）



写真32
SX02（北東から）

写真33 出土遺物(1)

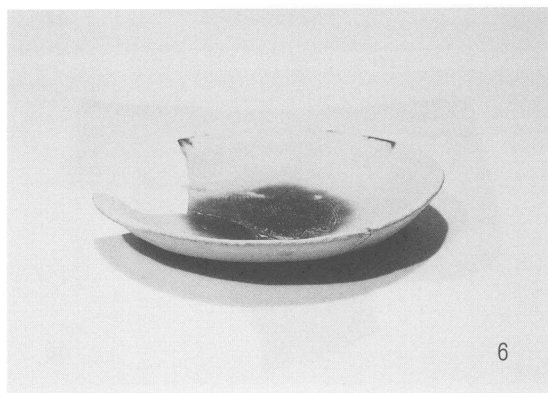
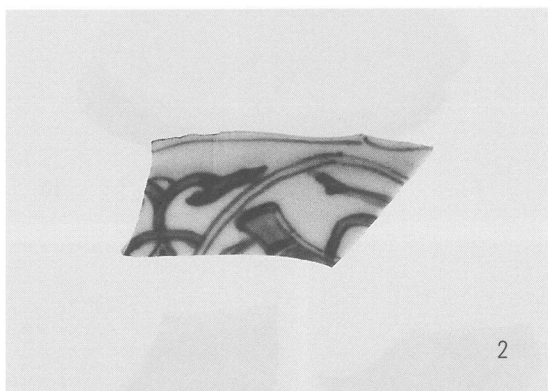
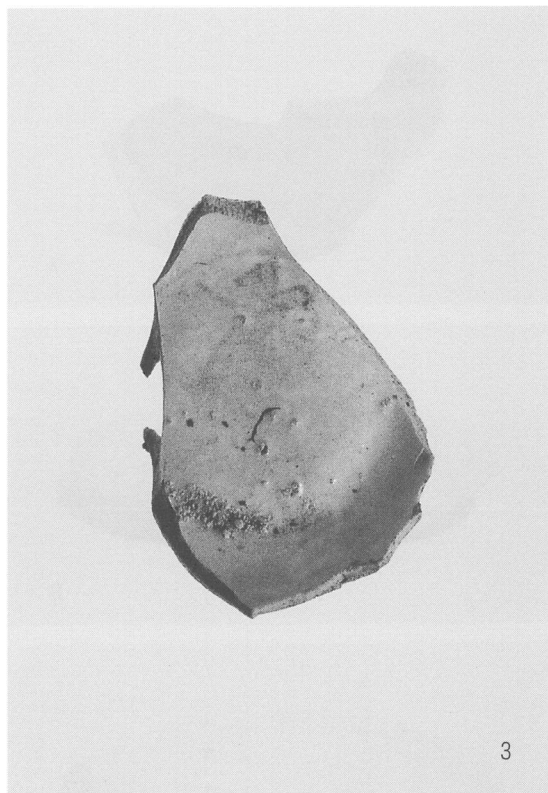
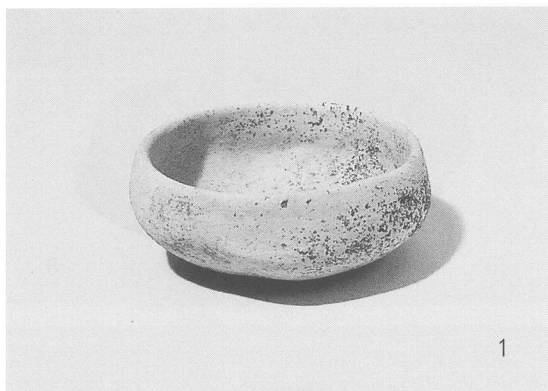
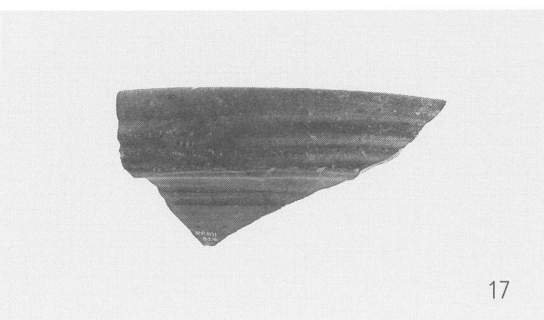
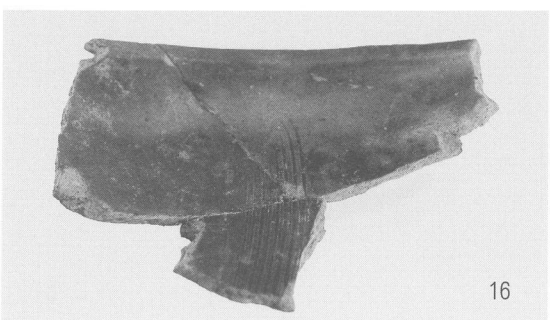
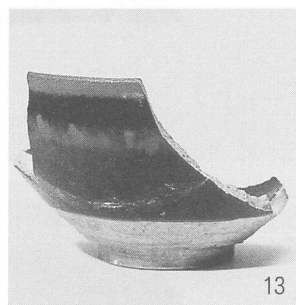
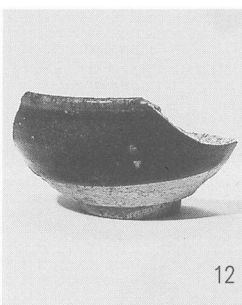
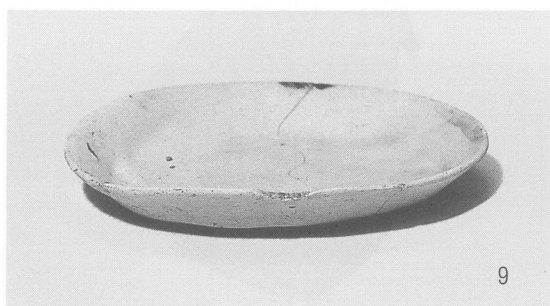
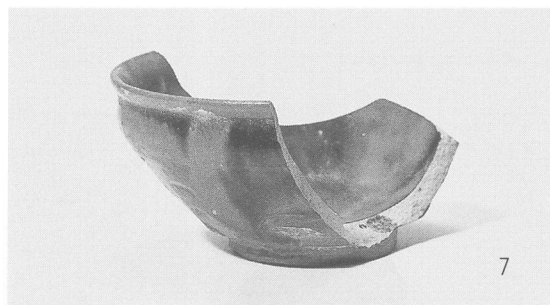


写真34 出土遺物(2)



報告書抄録

ふりがな	かくあんじだいが・ななじ こおりやまじょうだいよんじゅうさんじ
書名	額安寺第5・7次 郡山城第43次
副書名	
巻次	
シリーズ名	大和郡山埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	11
編著者名	服部伊久男・長谷川義明ほか
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1198 大和郡山市北郡山町 248-4
発行年月日	2007年10月10日

所収遺跡名	<small>かくあんじ</small> 額安寺第5次	<small>かくあんじ</small> 額安寺第7次	<small>こおりやまじょう</small> 郡山城第43次
所在地	<small>ぬかたべきたまち</small> 額田部北町1305ほか	<small>ぬかたべきたまち</small> 額田部北町1298ほか	<small>じょうないちょう</small> 城内町255ほか
市町村	29203	29203	29203
遺跡番号	—	—	—
北緯	34° 36' 03"	34° 36' 01"	34° 39' 08"
東経	135° 46' 16"	135° 46' 16"	135° 46' 51"
調査期間	平成7年1月23日～ 2月28日	平成9年3月17日～ 3月31日	平成8年6月27日～ 7月13日
調査面積	300㎡	30㎡	77㎡
調査原因	範囲確認調査	範囲確認調査	柳澤神社社務所建替え
種別	寺院	寺院	城館
主な時代	中世	中世	近世
主な遺構	土坑, 井戸, 溝	溝	整地土・土坑
主な遺物	土器類	土器類	土器類
特記事項	中世の遺構を検出		築城初期の遺構

額安寺第5・7次 郡山城第43次
大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集

2007年10月10日 発行

著作権所有 大和郡山市北郡山町248-4

発行者 大和郡山市教育委員会

印刷者 奈良市三条大路2丁目2-6
共同精版印刷株式会社